

第2章 学生の受入れ

2.1 アドミッションポリシーと学生の受入れ

2.1.1 学部

2.1.2 大学院研究科

2.2 入試・広報活動

2.2.1 広報活動と学生募集

2.2.2 入学者選抜方法

2.2.3 全学の入学試験状況

第2章 学生の受入れ

2.1 アドミッションポリシーと学生の受入れ

2.1.1 学部

① 工学部

【現状の説明】

(1) 学部1年生

工学部では、第1章で述べた教育理念、使命・目的を達成するために、以下の資質を持った人物を選抜している。

- ・進取の気質に富み、使命感を持って物事に取り組む志と覇気のある人
- ・理系科目が好きで、工学とその周辺分野に旺盛な知的好奇心を持つ人
- ・広く物事を捉えることができ、人間や社会を思いやる豊かな心情のある人

このような人物を選抜するために、「一般試験」「アドミッション・オフィス（AO）試験」「推薦試験」及び「特別選抜試験」の4種類の入学者選抜方式を採用している。

工学部の入学定員は表1のとおりである。2007年度から2009年度は7学科合わせて670人、2010年度は新学部の設置に伴い30人減の640人、2011年度は都市建設工学科を除いた6学科の定員の増減により60人増の700人となり、現在に至っている。入学定員700人の募集枠は一般試験で70%、AO試験及び推薦試験で30%程度である。

表1 工学部入学定員

学科名	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
機械工学科	150	150	150	150	160	160
電気システム工学科	80	80	80	70	80	80
電子情報工学科	80	80	80	70	80	80
都市建設工学科	70	70	70	60	60	60
建築学科	120	120	120	120	110	110
応用化学科	70	70	70	70	90	90
情報工学科	100	100	100	100	120	120
合計	670	670	670	640	700	700

入学試験別による入学者は表2のとおりである。一般試験による入学者は約55%、AO試験および推薦試験による入学者は約45%である。

志願者数の推移は表3のとおりである。志願者は2007年度3,245人から2008年度は669人減の2,576人となり約21%減少している。その後、志願者は増加して2011年度には4,144人となり、2007年度と比べて899人（28%）の増加となっている。2012年度の志願者もほぼ同数の4,104人である。

表2 入学試験別入学者

試験別	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
A ○	57	95	101	78	70	70
推薦	317	324	317	262	270	267
一般試験	412	337	437	416	384	414
特別選抜	12	7	12	6	10	12
合計	798	763	867	762	734	763

表3 志願者数の推移

試験別	年度					
	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
A ○	97	114	121	122	162	150
推薦	444	408	419	353	368	333
一般試験	2,687	2,029	2,359	2,638	3,589	3,596
特別選抜	17	25	25	22	25	25
合計	3,245	2,576	2,924	3,135	4,144	4,104

志願者の地域別分布は、従来から愛知県を中心に岐阜県、三重県及び静岡県を加えた東海4県に集中している。近年、この傾向はますます強くなっており、2012年度では表4に示すとおり、愛知県が66.6%、東海4県では96.1%となっている。

表4 志願者数の地域別分布（2012年度）

北海道	東北	関東	中部	東海	(愛知)	近畿	中国	四国	九州	その他	合計
1	8	5	60	3,944	2,733	25	6	2	14	39	4,104
0.02%	0.19%	0.12%	1.46%	96.10%	66.59%	0.61%	0.15%	0.05%	0.34%	0.95%	

(2) 編入生

工学部の編入学定員は表5のとおりで、2007年度から2009年度は7学科合わせて60人であったが、2010年度から21人と約1/3に削減している。編入学者は2007年度21人、2008年度9人、2009年度15人、2010年度9人、そして2011年度6人となっている。

【点検・評価】

一般試験による入学者の割合が募集枠に比べて15%程低くなっている。これは一般試験の合格者の入学率いわゆる歩留まり率が低いこと、その結果として、入学者の確保のために歩留まり率のよいA○試験及び推薦試験の合格者を募集枠より多くしていることによる。この傾向は今後も続くと考えられ、募集枠の見直しと一般試験の歩留まり率の向上を図る必要がある。

志願者は2007年度から2008年度にかけて急激に減少しているが、2009年度からは徐々に回復し、2011年度と2012年度は4,100人台で推移している。工学部では志願者増加対策の1つとして、工学部のトピッ

表5 工学部3年次編入学定員

学 科 名	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
機 械 工 学 科	15	15	15	5	5	5
電気システム工学科	10	10	10	2	2	2
電子情報工学科	10	10	10	2	2	2
都市建設工学科	5	5	5	2	2	2
建 築 学 科	5	5	5	4	4	4
応 用 化 学 科	5	5	5	2	2	2
情 報 工 学 科	10	10	10	4	4	4
合 計	60	60	60	21	21	21

クスや最新情報を記載した「工学部ニュースレター」を定期的（年3～4回）に発行し、受験生に送付している。このニュースレターは2009年からスタートしていることから、「ニュースレターによるPR効果」が志願者増加の要因の一つになっていると考えられる。

なお、大学全体では2007年度からの学長を中心とした「入学者安定確保のための取り組み」がスタートしており、この取り組みも志願者増加の要因の一つと考えられる。

編入学については、最近、志願者は急激に減少し、毎年、志願者0人の学科が幾つか生じている。入学者も2010年度から一桁台にとどまっている。このため、編入学定員の見直しを行い、2013年度から各学科2人、7学科合計で14人に定員を削減することとする。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

入学者の安定確保と入学者の質の向上を図ることが課題である。そのために、まずは志願者の増加対策が求められる。また、一般試験による入学者の割合を上げることも必要であり、適切な募集枠の見直しと一般試験の歩留まり率の向上を図る必要がある。今後もニュースレターを始め、ホームページ、オープンキャンパスなどによる積極的なPR及び入学者安定確保のための取り組みの継続により、志願者を増やして入学者の安定確保に繋げたい。

② 経営情報学部

【現状の説明】

経営情報学部では、育成すべき人材像を念頭に置きアドミッションを行っている。育成すべき人材像は、「現代社会では、さまざまな局面でコンピュータやインターネットなどの情報技術（IT）が利用されています。経営情報学科では、こうした時代の要請に応えるため、ITを中心にして、経営、会計、経済、法律などの各分野を学習することで、ITを活用して企業活動の中核を担う人材、ITを企業活動に効果的に反映できる人材など幅広く活躍できる人材を育成しています。」と定めている。

【点検・評価】

経営情報学部は3学科からなるが、それぞれの定員は経営情報学科110名、経営学科110名、経営会計学科80名、の合計300名である。これに対し2012年度の入学者は124名、125名、97名の計346名である。

入試の形態と募集数は、AO（アドミッションオフィス）入試39名、推薦入試73名、前期試験155名、後期試験9名、センター利用入試24名である。これに対し当学部の入試ごとの入学者は、AO（アドミッションオフィス）入試82名、推薦入試163名、前期試験64名、後期試験34名、センター利用入試3名であった。このことは前述した当学部の人材像が、基礎学力を重視するというよりも、意欲や粘り強さを求めるものであることから、AO入試や推薦入試を重視した方針であることの結果である。ちなみにAO入試と推薦入試を合わせた入学者は245名と全入学者346名の71%を占めており、学力に囚われないアドミッションを行っていることがわかる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

AO入試や推薦入試を重視する方針に変わりはないものの、就職活動などを考えると学力を軽視はできない。2002年度から2011年度までの10年間、新入生を対象に行った英語と数学の学力テスト（フレッシュマンテスト）の成績で見ると本学部は常に全学の最下位である。学生の「自ら学ぶ力」を発掘し社会人としての最小限の学力を涵養する自覚を促して行くことも重要である。

③ 国際関係学部

【現状の説明】

国際関係学部全体としては、高校時代に英語や外国語の授業、そして地理をはじめとして倫社・公民など社会系の授業に関心をもった生徒の入学を促す意識で選抜を行っている。また、そうした人材が入学してくるよう、入試のフィルター体制や広報に努めている。また、日中韓の東アジアが世界のなかで占める経済的・社会的地位が急激に上昇している現在、アジア中国という関心や意識を持った生徒も強く受け入れたい。つまり、ここでアジアはもちろんのこと、地理の授業への関心というのは、我が国内外を問わず、世界のなかの日本の位置も含めて、世界情勢や外国文化、そしてそれらとの国際関係のなかで、私たちがどういう進路を進めていかねばならないか、という指針に強い意識を持つ学生の入学を促したいのである。

上記の意味では、外国文化や異文化・他文化のみならず、それと比較し照応しあう関連で、自文化や民俗伝統に関心を持つ学生も受け入れたい。また、そうした学生が入学して、いわゆる比較の視点を発展させている。したがって、高校生からよく問い合わせてくる、高校にはなく大学で設置されている授業でいえば、文化人類学や国際関係論、さらには民俗学にも関心を持つ学生を歓迎したいと考えている。国際といっても、グローバル時代に求められる「国際」の学びは、かつてのような欧米偏重による外国語・外国文化の学習だけではない。むしろ、それら欧米文化の学びは今日の国際関係でも重要度が高いことはまちがいないので、これを含みつつ地球を南北に分かつ経済格差による発展途上国や英語以外の多様な言語とその文化・社会に関心を持つ生徒諸氏の入学をも促したいと考えている。また、そうした関心をもつ学生が入学してきており、かれらは発展途上社会や地球の南北問題にかかわるボランティア活動・シンポジウムなどに向向くようになってきている。

【点検・評価】

学部を構成する3学科の点検をしておくとして、国際文化学科は、世界のなかの「文化の多様性」への学びを標榜し、欧米偏重でもアジア偏重でもない多様な世界の諸文化に焦点が当たった、これに準じた強い関心と学習意欲をもった学生の入学が確保できている。それは、カリキュラムポリシーの一貫として

入学後すぐに行う本学の学外施設・中部大学研修センターをつかった研修で、関心地域を問うアンケートへの回答として、欧米に加えて約半数が韓国や中国、イスラーム圏などにも強い関心を寄せていることから判断・評価できている。学部・学科で学んでいくうちに、さらに枢軸にはないマージナルな地域文化への関心が増幅されていくことが予測できる。国際関係学科も、政治・経済・法から外国社会や国際関係を考察するという趣旨に見合った学生が入学してきていると評価できる。入学者数から見ても、とくに最近2か年、2011年度と2012年度では、定員割れしていた国際関係学部の全体入学者が定員を充足して、教育の現場での教師－学生の教育学習上のコミュニケーションの質が格段に上昇した。ただ、中国語中国関係学科に関しては、アドミSSIONの入学人員から見れば、高い教育理念にもかかわらず、それに見合う人員を確保できないでいる。3年前の2009年に開設され、完成年次の4年生を教育し卒業生を出す直前まで学科が育ってきたが、ここでの定員不充足という問題を見つめ、学部内でのより有機的で発展的な再編に進めるべきかを考える時期にあっている。

表1 入学定員と入学者数の推移

年度 学科	2008年度		2009年度		2010年度		2011年度		2012年度	
	定員	入学								
国際関係学科	70	57	50	59	50	47	50	56	50	67
国際文化学科	70	55	50	57	50	45	50	55	50	68
中国語中国関係学科			40	20	40	21	40	32	40	19
学部合計	140	112	140	136	140	113	140	143	140	154

2006年度に国際関係学科・国際文化学科の入学定員が80名ずつあったものを、2007年度に10名ずつ削減したが、その定員を満たせない状態が続いたため、2009年度に両学科の定員をさらに20名ずつ圧縮し、その圧縮分40名を充当する形で3つ目の学科、中国語中国関係学科を設置した。しかしながら、中国語中国関係学科は、開設以来、入学定員を満たせない状態が続いている。

一方、国際関係・国際文化両学科は、最近2年間それぞれの入学定員を充足し、中国語中国関係学科の定員割れ分をカバーして、学部としての入学定員も満たす状態を回復してきている。上述したように中国語中国関係学科の立て直しが急務である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

学部全体として、3学科の動向をみると、上述の中国語中国関係学科にかかる緊急の課題に対処する必要がある。そのために、より創造的な国際学習、外国学習、外国語学習が可能となるよう、3つの学科の有機的な再編成を考案し始めている。時代と世界が要求する中国語と中国関係の学びを、国際関係学科と国際文化学科に有機的、複合的に埋め込んでより発展的で教育の実りに結びつく形を創生しようということである。それを高校に広報していく。また、中国語中国関係学科の3年秋・冬期の就職への動きが活発で、企業から中国語中国関係学科への関心の高さを示しており、中部大学全体のなかでもより早くより高い就職率に結びつくことを期待している。最高学年の3年生へのコンタクトを深め、中国語中国関係学科の新規卒業生に関心を示す就職関連企業も、知名度の高い会社を多く含むことから、この中国語中国関係学科の人材育成のディプロマポリシーの成功を社会や高校に広報していくことがアドミSSIONの上でも必要であり、また有効であるという見通しをもっている。

より具体的な方策・手続きとしては、外への発信力を高めることと考えている。その意味で、オープンキャンパスでの学部・学科説明は、時間を十分にとれるので、生徒諸氏が十分に納得して帰る。このオープンキャンパスへの生徒諸氏の関心喚起と来学を促すことを広報課・入試課のダイレクター等の諸手段によって強化したい。オープンキャンパスだけではなく、大学祭においても在学生在が作成した国際協力活動や海外研究成果のパネル製作と展示は、高校生と学生のコミュニケーションを促すツールともなっており、これをより積極的に盛り上げていきたい。模擬授業、学科説明も積極的に学部・学科で引き受ける。中部圏の大学展には、必ず誰かが出席する体制をとりたい。入学生・在学生の出身高校を、その学生の活躍状況を報告する形で情報交換度を高くし、高大連携へと向かっていきたい。在在学生による卒業高校へのハガキ送付も意味ある手段である。また、近年、商業高校に新たに国際コースが設置されたり、以前のコースが拡充されたりする動向が見られ、その高校生の将来展望とつなげて、高大連携度を増していきたい。ブログやニュース・レターといったメディアのより積極的な活用も意味ある。地域密着という理念が一方で意味をもつと同時に、最近、富山県、福井県、石川県など中部日本の北陸地域の高校生や高校からも情報問い合わせが見られ、またときに受験生・入学生となっていることもある。こうした、中部圏のJR中央線などを中心として鉄道沿いに、受験生からみた通学や帰省などで親近感と相対的な近距離感をもってきている地域に遠方拡大の努力を行うことや、遠隔の高校にも情報発信して、今までの入学都府県地図から拡大、発展していく必要がある。いわゆる受験進学校にあって、広く平均的な高得点型の生徒でなくとも、マニアックな生徒の持つ能力を、むしろ積極的に自分の軸をもった生徒と再評価して自己発見してもらい、高校との情報交換のもとで、こうした自分の世界を有することの意義とそうした高校生の将来に向けた成長可能性の大きさを説いて、若者人材を発掘していく高大連携の教育がなされる必要がある。異なる文化や異なる価値観やマージナルな世界への関心と執着は、国際学修や外国文化研究にとって基本的に重要な態度であり、こうした人材の発掘を目指す。そのことは、併設校との交流にも言え、高校への模擬授業、学科説明の実施や、英語教育の共同研究会をひらくなど高大教員間の交流ももっと増強していく必要がある。入学前教育も、もっと整備して情報交換しあい大学生になる心構えの涵養や進学と進路への意識を生徒諸氏が自覚していく体制をとっていくことにも意味がある。

高大連携をめぐるっては、国際関係学部のより具体的な事業として、いくつかの試みを強化していく必要がある。高校や初等・中等教育との連続性でいえば、オープンキャンパス、大学祭などでの在在学生による南側社会の困窮状況に面する協力活動や日本や世界の被災地との協力活動を、パネル製作・展示などを通じて高校生とともに学んでいく。こうした出張授業をふくむ高校生を対象とした南北問題にかかわるテーマの模擬授業も進んで行っていく必要がある。また、各高校の国際コースとの連携学習、とくに最近力を入れている商業高校の国際コースの強化活動にも手を携えるべきだろう。メディア化の活用でいえば、ブログ、ニュースレターなどで中部圏以外の高校生に情報発信して、グローバルな世界の諸問題を提示していくことも求められる。その接合点での入学前教育も、高大で情報交換しながら大学生で学ぶ自主的な学びの構えの涵養とそのスタートアップの序奏をなしていくことは意味がある。

すでに上記で3学科のアドミッションについて述べているが、下記に各学科から述べる。

国際関係学科

【現状の説明】

国際関係学科は、全国的に見ても歴史のある「国際系の社会科学専門学科」という特色を持つ。したがって、世界で起こっている時事問題や外国情勢に関心を持つ学生の入学を促したい。高校時代の政経・倫社や公民といった社会系の科目群に強い関心をもつ学生の入学を図りたい。とくに、世界の政治・経済・法にかかわる諸問題に関心を持つ学生の入学をはかる。外国情報への関心ということでは、英語の学びへの強い姿勢も基本的なフィルターになっている。将来、国際協力や国際関係の知識を活かして、外国や地域や職場で問題解決に取り組む仕事につきたい展望をもっている学生の入学を図る。

【点検・評価】

近年、入学生の受け入れとその後の教育の円滑な深化、さらにそれに随伴した入学生の意識ある学習を促進するために、学生を受け入れる前の説明にかなりの重点を置くようになってきている。受験生と本学との最初の直接的な接触となる「オープンキャンパス」こそ、最大の重要な広報機会あるいは交流機会ととらえ、ここに本学部教員が研究・教育に携わっている世界各地の文化情報を文字と画像の両面で示して、本学部がもつ「国際性」「外国文化性」の地球的な広がりや深まりを入学前に学んでもらうプレ教育として実践している。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

本学科による上述その他の変革的取り組みが功を奏し、2012年4月の学科入学者は前年の56名から67名へ大きく増加を遂げた。学生受け入れの流れは、「オープンキャンパス→AO入試他受験→学科・学部入学」という流れである。その最大ともいえる第一のプレ教育機会のオープンキャンパスでは、国際関係学科はユニークなビジュアルパネルを10数枚展示している。これが、来学受験生からは「入学後の学科生活がわかりやすい、是非入学したくなった」などと好評を得ている。

国際文化学科

【現状の説明】

国際文化学科では、入学者に3つの能力を伸ばそうと考え、それにそって3つの領域に関心の高い学生を受け入れるよう広報している。それは、「文化の多様性を知る」「それをつなぐツール（言語）を手に入れる」「それを活かす発想力・実践力を身につける」という3つである。

【点検・評価】

上述の3つの焦点とその能力育成像からなるアドミッションポリシーに応じる形で、受験者数は回復してきている。国際文化学科の場合は、現在の2年生（2011年度入試の入学生）以降、入学者中の女子の割合が5割を超え、2012年度の入学生ではその割合がさらに増加した（68名中38名が女子）。その動向と並行する形で学生の学力、人間力、基礎教養力も上がってきていると、学科教員全員が観察・評価している。それは、大学における日本語の運用や礼儀・マナーにおいて、日常のコミュニケーションのなかで端的に表れている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

真面目な気質が多い女子高校生の入学を促すために、実業につながる商業高校・実業高校に在籍する女子高校生への説明を強化している。入学してきた商業高校卒業の女子学生の母校への働きかけと交流の機会を増大させている。また、こうした高大連携をより強化していく直接的な手段・方策として、具体的な高校授業への参観・意見交換へと動いている。それを自然に行いやすい同一学園の高等学校（春日丘高校・中部大第一高校）との連携を強める形で実施している。英語の授業では、高校の英語授業訪問、国際コースの授業参観など行っており、具体的な高大教員間の意見交換にまで発展してきている。次のステップは、高校の英語の先生を大学英語授業に招待し参観してもらう形で意見交換を図ることになっている。こうした方策をさらに継続的に発展させていきたい。

中国語中国関係学科

【現状の説明】

中国語中国関係学科では次のような意志を持つ人物像、人材を求めている。中国語の習得や、中国・東アジアの政治・経済・文化・社会に関心を持ち、これらを世界の中で位置付けながら、理解しようとする人。また、積極的に他者とコミュニケーションを図る意欲があり、将来は中国やアジアに関わる仕事に就きたいと思う人、である。

【点検・評価】

上述のような学習の方向性と意志と意欲をもつ学生の入学を確保するために、何をしているかを点検・検証する。まず、選抜の方針が重要となる。AO（アドミッション・オフィス）試験では、志願者がテーマ発表を行い、また教員の講義を聞いてディスカッションを行うことで、物事に取り組む意欲や基礎的なコミュニケーション能力を評価することで、上述の人材確保のフィルターとする。また、将来中国語の知識を活用して社会で活躍する意志があり、中国語中国関係学科における受講能力がある人を選抜する。推薦試験では、高等学校長の推薦ならびに書類審査・小論文・面接を行う。このとき、基礎学力・部活動などの実績から高等学校における成果や意欲・実行力について評価するとともに、とくに中国の文化・社会、政治・経済について関心があり、学科の教育目標に適合すると判断される人を選抜する。学力試験では、個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により総合的に評価し、基礎学力はもちろんだが、とくに日本語や英語の言語運用能力などに優れた人を選抜する。特別選抜試験では、海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象となる。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、中国語中国関係学科の学修に対して明確な目的意識があり、中国・日中や東アジアから世界を見る、視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。中国にむけてあらゆる次元の意欲をもつ人材の入学を促していく、ということでは、その質的レベルを満たす人材の入学に、かなりの程度で成功を収めていると評価できる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

アドミッションそのものについては、国際関係学部全体では定員に達しているものの、中国語中国関係学科のアドミッションは問題となる。上述のように受験産業に出向いて聞き取り調査を行ってきた結果から、中国語・中国文化を高校生のレベルで学ぼうと意識する生徒は数少ないことが判明している。つまり3年前の中国語中国関係学科の創設は「パイの少ないところ」に参入した可能性がある。ただし、

「入学者受け入れ方針に沿った学生受け入れ方法の工夫」は行っている。これまで行ってきた高校訪問は無作為になされているのではなく、「学科でよい成績・パフォーマンスをしている学生の出身校」や、「中国に関心を持つ生徒がいる高校」に足を運んでいる。

学部全体の継続的方策として述べたように、中国語中国関係学科の3年秋・冬期の就職への動きが活発で、企業から中国語中国関係学科への関心の高さを示しており、中部大学全体のなかでもより早くより高い就職率に結びつくことを期待している。最高学年の3年生へのコンタクトを深め、中国語中国関係学科の新規卒業生に関心を示す就職関連企業も、知名度の高い会社を多く含むことから、この中国語中国関係学科の人材育成のディプロマポリシーの成功（すでにその動向が表れている。）を社会や高校に広報していくことがアドミッションの上でも必要であり、また有効であるという見通しをもっている。

④ 人文学部

【現状の説明】

各学科ともそれぞれのアドミッションポリシーに基づき、多様な入試方法によって入学者を受け入れているが、おおむね、推薦試験等（AO、特技、併設校、指定校、一般）で5割強、残りの5割弱を学力試験で受け入れている。学科によるばらつきはあるが、学部全体としては2007年度からの5年間とも定員以上の学生が入学している。入学者の安定確保のために、各学科とも、オープンキャンパスや中部大学フェア、大学祭、出前講義による学科紹介、学科パンフレットやHPでのPRに努めている。また、併設校との情報交換や、併設校推薦合格者への入学前指導も定着してきた。

【点検・評価】

学部全体としてはこの5年間とも定員を確保しているが、学科ごとにみると、入学率の読み違いに起因するものも含め、3学科で定員割れを起こしたことがある。この2年間に限ってはすべての学科が定員を満たしており、上記のさまざまなPR活動も寄与しているものと考えられる。推薦試験合格者への入学前教育は、併設校推薦合格者には定着したものの、推薦試験合格者全体に拡大するなど、質量ともにさらなる拡充の余地がある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

入学者の安定確保に関しては、PR活動のさらなる充実とともに、学科の特色の明確化等、他大学の類似学科との差異化を図り、ブランド力を向上させていくことも方策の一つと考えられる。

近年、大学生の基礎学力の低下が指摘されることが多いが、人文学部も例外ではない。対応策の一つとして、合格から入学までの期間の長い、推薦試験の合格者への入学前教育の強化、拡充も検討しなければならないだろう。また、中途退学者の退学理由の中に学科の教育内容とのミスマッチということがしばしばあるが、学科内容のPRの強化と同時に、入学後の早い時期にそのような学生に気づき、転学科や進路変更を勧めることも重要だと考えられる。

以下に各学科の点検・評価を記述する。

日本語日本文化学科

【現状の説明】

日本語日本文化学科では、「世界の中の日本」という視点から日本語や日本文化を理解し、それに応じた表現能力を身につけることを教育の目標としている。求める人物像は、日本語・日本文学・日本文化に対して強い関心を持ち、日本のことをより深く理解しようと思う人、また、読書が好きな人や文章を書きたいと思う人、国語・日本語の教員になりたいという人である。入学試験における選抜の方針は、AO試験では、書類審査・講義・面接を行う。講義では、言語・文学・文化に関する文章を教材としてディスカッションを実施し、読解力と授業への積極性を持っているかを、面接では、日本語日本文化学科で学ぶことに対して明確な目的意識を持っているかを選抜の基準としている。推薦試験では、高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接で選抜している。小論文では書く力を、面接では話す力を評価し、日本語日本文化学科の教育システムに適性がある人を選抜している。学力試験では、個別の筆記試験による特別奨学生試験、前期試験、後期試験および大学入試センター試験利用試験により評価し、日本語日本文化学科で学ぶための基礎学力を備えた人を選抜している。特別選抜試験では、海外帰国子女、外国人留学生、社会人を対象とし、書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、日本語日本文化学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜している。

【点検・評価】

1998年度の開設以来、日本語日本文化学科の入学定員は80名であったが、2010年度より70名となった。2007年度から2011年度にかけての定員数／入学者数は、80／85、80／97、80／97、70／100、70／77で、常に入学定員を充足してきた。2010年度は定員の1.43倍の入学者があり、中には授業内容についてこられない学生も見られた。入学率の予測は困難ではあるが、その後の教育体制に及ぶ影響を考えると1.2倍を超えないように十分注意を払う必要がある。

AO試験以外の入試では入試課より担当の連絡があるが、AO試験では書類審査は判断基準が一律となるように、年間を通して主任、主任補佐の2名であたっている。講義担当者、面接担当者は、毎回2名1組であるが、専門領域の異なる2名の組み合わせを原則とし、志願者の志望動機や目的意識を引き出すことに成功している。

入学定員確保のために、オープンキャンパス、AO試験事前ガイダンス、学科パンフレットの作成・改訂、ホームページの更新などを行い、成果をあげている。この他にも併設校におけるミニ講義や学科説明、教育実習先等の高校訪問、模擬講義依頼校での学科説明などを行っている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

併設校の入学予定者を対象とした入学前指導を行っているが、どの程度のレベルのものをどれぐらいの量で課すのか試行錯誤している。併設校からの入学者数は毎年6～8名程度であるが、基礎学力に問題がある場合や本人の志望とのミスマッチからくる無気力などもあり、併設校の教員との連携が不可欠である。すでに定期的に交流を図っているが、今後、より密な連携が必要であると考えられる。一般推薦試験や学力試験による合格者の場合はいかに入学率を高めるかが重要である。そのためには受験生にとって魅力となる学科の「ウリ」を立てること、中部大学のブランド力を高めることなどが考えられる。全学的な方策はともかく、学科としては特にAO試験事前ガイダンスとオープンキャンパスに力を入れ、高校生が必ず受験してくれるような接触を心がける。オープンキャンパスの学生スタッフに対する指導

も行っていきたい。学科パンフレットは広報課と相談しつつ増刷、小規模の改訂を行っているが、今後は定年による教員の異動が2、3年ごとに続くことが予想されるため、原則としてその機会に改訂する。近い将来、内容を大幅に改訂することがあると思われるが、その際の費用等の確保、調整が必要となる。

英語英米文化学科

【現状の説明】

英語英米文化学科は在学中に本格的な英語運用能力を身につけ、英語圏文化を深く理解したいと強く望んでいる人材を求めている。その上で、次の言葉の意味が分かる人ならさらによい。“Actions speak louder than words.”（言葉より行動で示せ＝不言実行）。加えて、積極的に海外に出て、異文化体験をし、視野を広げたいと考えたことのある生徒なら申し分ない。

- 1) 2011年度に続いて2012年度も入学定員を確保できた。広報活動の一環として地元の高校英語教員向けに鶴舞キャンパスで行ってきた「中部大学・ケンブリッジ大学出版局英語教育セミナー」がそれに一役買っているかもしれない。
- 2) 県内外の高校で模擬講義を行い、英語英米文化学科の魅力ある授業内容の一端を知ってもらう努力を積極的に行ってきた。
- 3) AOガイダンスでは、学生らによる留学体験談を聞かせたり、ホームムービーを見せたりして、留学の効用を説いた。また質疑応答に答えることで、入試の前の不安を可能な限り取り除いてきた。
- 4) AO試験と推薦試験で入学が早くに決まった生徒全員に対して、入学前課題を課している。また指導日には学力の点検を行うとともに、その補強を行ってきた。
- 5) 学科パンフレットを更新し、オープンキャンパス時にこれを高校生に配布することを通じて学科の宣伝をしてきている。

【点検・評価】

毎年、上記の学生像の獲得を念頭にAO試験など入試業務にあたっている。とくに生徒のコミュニケーション能力を重視し、海外留学にふさわしい人材かどうかを見極める点が肝要と考えている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

「英語英米文化セミナー」「英語教員セミナー」「高校模擬講義」を積極的に行い宣伝活動の輪をさらに広げていきたい。学科パンフレットの更新、オープンキャンパス、ホームページ更新などを通して、留学希望の高校生に狙いを定めて彼らを受験生として獲得していく。

コミュニケーション学科

【現状の説明】

求める人物像は、「高度情報社会におけるさまざまなメディアやメディア文化に対して強い関心を持ち、それらを学問として探求したい人。また、メディア活用に不可欠なコミュニケーション力を磨く意欲があり、将来はテレビ局や新聞社などで情報発信に携わる意志のある人」である。

具体的な選抜の基本方針としては、コミュニケーション学科で学ぶための基礎学力を備えている人（学力試験）、自身の考えを的確な表現（文章、および口頭）で伝えられる人（推薦試験）、メディア情報の影響力を客観的に読み解くことに意欲的な人（AO試験）、明確な目的意識を有する人（特別選抜

試験)であることを重視している。

【点検・評価】

2007～2011年度入試の定員/志願者数/入学者数は、それぞれ80/182/73、80/193/82、80/228/90、70/184/64、70/252/91であり、2007年度と2010年度に定員を割っている。このうち、AO試験による入学者数は、それぞれ5(全入学者数の6.8%)、15(18.3%)、21(23.3%)、6(9.4%)、20(22.0%)であり、期間平均では16.0%である。年度によるばらつきはあるものの、入学者全体に占めるAO試験による入学者数の割合は総じて高い。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

現時点では、「求める人物像」として「将来テレビ局や新聞社などで情報発信に携わる意志のある人」を設定することは、依然としてある程度入学者の確保につながっている。しかし、この5年間で2回の定員割れを経験したコミュニケーション学科にとって、昨今の若者の新聞・テレビ離れ、すなわちマス・コミに対する関心の薄れ具合、および対照的に高まりゆくインターネット上でのメディア・コミュニケーション活動への関心は、今後の「求める人物像」の再検討の材料である。

また、AO試験による入学者比率の高さは、中にはコミュニケーション力に優れ、学科の牽引力となる学生が存在することを考えれば、必ずしも悪いとは言えない。しかし、やはり学力試験入学者と比較すると、AO試験入学者は、併設校推薦入学者と並んで、総じて基礎学力に不安材料のある学生が多いのも事実である。今後は、入学前教育のいっそうの充実を図り不安材料の解消に努めることが課題である。また、それと同時に、後述の地域連携教育などによるブランド力の向上を目指し、より多くの優れた志願者を安定確保することが学科繁栄のための重要課題である。

心理学科

【現状の説明】

心理学科では、数学、英語、国語等の主要科目をはじめとした、学習活動に真摯な態度で取り組んできた人および「こころ」に関わる問題について、自らが積極的に解明していこうとする意志のある人を、様々な方法で選抜している。AO試験では、一定水準以上の学力があると認められる人に対して課題を出し、心理学を学ぶことに対する目的意識が明確か、他者と共同しながら積極的に問題を解決できるか、適切な論理的思考および文章表現やプレゼンテーションができるか、これらの点で優れた人を選抜している。推薦試験では、高等学校長の推薦ならびに書類審査、小論文と面接を行い、学業成績や学業以外の活動で総合的に優れていると認められ、しかも心理学を学ぶことに対する目的意識が明確で意欲も高く、かつ心理学の修得に要求される論理的思考力と表現力を身につけている人を選抜している。学力試験では、個別の筆記試験による特別奨学生試験、前期試験、後期試験、および大学入試センター試験利用試験により総合的に評価し、心理学の知識と研究方法を円滑に修得できる基礎学力を身につけている人を選抜している。また、特別選抜試験では、帰国子女、外国人留学生、社会人を対象に、書類審査、小テスト、小論文および面接によって評価し、心理学に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜している。

【点検・評価】

2007年度からの5年間の心理学科の定員／志願者数／入学者数は、80/375/98、80/365/107、80/414/100、70/416/128、70/498/74であり、志願倍率は4.7、4.6、5.2、5.9、7.1倍へと順調に伸びている。2010年度は前期試験合格者の入学率（入学者数/合格者数）が例年になく異常に高くなり、そのため入学者数が大幅に増えてその後の教育体制に影響が及んだ。様々な要因が入学率に関係し、その予測は困難ではあるものの、適正な受け入れ人数を維持できるよう十分注意を払う必要がある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

2013年度より入学定員が20名増員され90名になる予定であるが、その量的確保もさることながら、受け入れ学生の質を高めることが今後の課題となろう。心理学を学ぼうとする高い動機づけと学力を持つ人、そして大学生活への適応性が高い人を受け入れるために、上記の各種選抜方法の特色をさらに生かすとともに、選抜方法の種類別入学者数の配分を見直すことも考慮せねばならない。

歴史地理学科

【現状の説明】

歴史地理学科は、歴史や地理に対して強い関心を持ち、その双方から複眼的に現代の諸問題を探ろうとする人を求めている。また、他者と積極的にコミュニケーションを取り、物事に柔軟に対処し、将来は教員、学芸員、不動産、旅行関係の仕事に就きたいと思う人にもぜひ入学してもらいたいと考えている。

過去5年間における入学者数は、多少のばらつきはあるもののほぼ定員数プラス数を獲得することができている。定員数が80名から70名になったことにより、やや偏差値も上昇した。学生がどのようにして歴史地理学科の情報を得たかという点、ホームページの閲覧、高校の教師からの推薦、オープンキャンパス来校などがあげられている。

【点検・評価】

A O試験や推薦試験では、上記の資質を備えた学生の獲得を念頭において入試業務にあたっている。また、歴史と地理について自分の興味を積極的に語ることができ、他とディスカッションできる人を選抜するよう心がけている。現状ではとくに問題は認められないものの、今後の入学定員増に対する対策を考える必要がある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

もっとも大きな課題は、学力試験における合格辞退者をどのように減らせるかであろう。これは全学的な問題でもあると考えるが、学科としてもブランド力を高めるために力を尽くしていきたい。また、受験生のさらなる確保のために、ホームページ更新、学科パンフレットの更新、オープンキャンパス、大学祭などを通して、恒常的に宣伝活動を行っていく必要があるだろう。

⑤ 応用生物学部

【現状の説明】

応用生物学部では学科ごとに以下に示すような独自のアドミッションポリシーを策定し、ホームページにて一般公開している。

応用生物化学科

求める人物像

化学や生物の科目が好きで、バイオサイエンスおよびバイオテクノロジーを学びたいと強く思う人。
将来は医療や医薬品・食品などの分野で活躍したいと思う人。

選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

「バイオ」と「化学」に興味を持ち、学習意欲を持っているかどうか、試験課題や面接において積極的に対応できるかどうかを総合的に判断し、優れた人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接で総合的に評価し、「バイオ」と「化学」の両分野に興味を持ち、学習意欲がある人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により評価し、応用生物化学科における教育内容に適応できる人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、応用生物化学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

環境生物科学科

求める人物像

さまざまな環境問題への関心を持ち、自己の目標達成のために意欲的に取り組もうとする人。

選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

「バイオ」と「化学」に興味を持ち、学習意欲を持っているかどうか、試験課題や面接において積極的に対応できるかどうかを総合的に判断し、優れた人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接で評価する。特に書類審査では、学業に加えて環境・生物・農業関係の資格取得状況、部活動、ボランティア活動について問う。環境生物科学科の教育目標を理解し、意欲的に勉学に取り組む姿勢のある人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験

利用試験」により評価し、学力優秀な人を選抜する。

- ・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、環境生物科学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

食品栄養科学科・食品栄養科学専攻

求める人物像

「食」や「栄養」に対して強い関心を持ち、何事にも積極的に取り組む姿勢のある人。また、他人の考えを理解・尊重し、いろいろな人々とコミュニケーションを取りながら、自分を成長させていく意志のある人。

選抜の方針

- ・AO（アドミッション・オフィス）試験

「食」や「栄養」に関心を持ち、その分野に対して強い学習意欲を持つかどうか、また、試験課題や面接に積極的に対応できるコミュニケーション能力を有するかなどを総合的に判断して選抜する。

- ・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により総合的に評価する。特に、食品栄養科学関連分野に強い学習意欲を持つ人を選抜する。

- ・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により総合的に評価し、食品栄養科学専攻における教育内容や目標に適應できる人を選抜する。

- ・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、食品栄養科学専攻に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

食品栄養科学科・管理栄養科学専攻

求める人物像

食と健康に対して関心を持ち、そのために生化学・分子生物学・微生物学などを学び、その上で管理栄養士の国家資格に必要な食品・栄養科学の知識を身に付け、将来管理栄養士として活躍しようと思う人。

選抜の方針

- ・AO（アドミッション・オフィス）試験

学業および学業以外の実績を書類審査し、講義や面接も含めて総合的に評価する。そして、食と健康に関する専門職業人を目指して意欲的で粘り強く取り組む姿勢がある人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により総合的に評価する。特に、管理栄養科学関連分野に強い学習意欲を持つ人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により総合的に評価し、基礎学力・応用力・論理的思考などに優れた人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、管理栄養科学専攻に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

応用生物学部の2010年度における入学定員は、3学科合わせて260人である（第1章、1.2.1-⑤、表1）。入学定員260人の募集枠は大きく分けて、一般試験で73%、推薦試験で17%およびAO入試で10%程度である。本学部の3学科は、一般試験・推薦試験ともに同じ日に入学試験を実施している。

一般試験による入学者は、2007年度214人、2008年度139人、2009年度180人、2010年度145人、2011年度146人となっている。推薦試験は公募制推薦、指定校推薦及び併設校（春日丘高等学校、中部第一高等学校）推薦に分かれている。推薦試験入学者は、2007年度84人、2008年度106人、2009年度101人、2010年度121人、2011年度130人と増加の傾向にある。また、AO入試入学者は、2007年度10人、2008年度41人、2009年度53人、2010年度34人、2011年度28人となっている。

本学部への志願者数は、2007年度の1,864人から2008年度には1,608人に一旦減少したが、その後、2009年度1,841人、2010年度2,115人、2011年度には2,379人と増加傾向に転じている（第1章、1.2.1-⑤、表1）。2011年度志願者について地域別分布を見ると、愛知県が60.3%を占め、愛知県を含む東海4県（愛知・岐阜・三重・静岡）で91.1%となっている。

【点検・評価】

(1) 入学者受入れの方針の明確化と周知

学科ごとに策定した上記のアドミッションポリシーはホームページに掲載され、広く一般に公開されている。このポリシー内容の概要は、学部のホームページ中の学科概要や学科紹介のコーナーで、あるいは学部パンフレットにおいて、一般にも分かりやすい形で示されている。また、オープンキャンパスや模擬講義においても、積極的にアドミッションポリシーを紹介したり、学部ホームページアドレスを記載したカードを配布したりするなど、ポリシーの情報公開について努めてきたので、社会に周知できたものと評価している。

(2) 入学者受入れの方針に沿った学生受入れ方法の工夫

図1に、2007年度以降における入試方法別の入学者数の比率の推移を示す。この図にみられるように、近年、推薦入試入学者の占める割合が増加傾向にある。この傾向の背景として、ポリシーにも記されているように、本学部は高い学習意欲をもつだけでなく、人間的にも優れた学生の入学を促進するため、面談を通じて選抜が行える当該方法を重視していることが受験生に理解された結果であると考えられる。

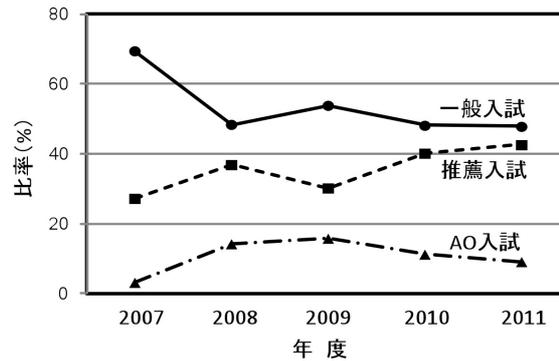


図1 入学者数の比率の推移 (入試方法別)

(3) 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持

表1に2007年度以降における収容定員及び入学定員と在籍学生数の推移を示す。この表に示すように、2008年度と2009年度には「在籍学生数 / 収容定員」の値が1.2を超えており、在籍学生数がやや超過気味であったが、それ以降では1.2以下の値となっており、定員方針に沿った学生受入れ数が維持されていると評価できる。

表1 収容定員及び入学定員と在籍学生数の推移

年度	2007	2008	2009	2010	2011
入学定員	240	240	240	260	260
収容定員	1020	1020	1020	1052	1052
在籍学生数	1159	1236	1272	1248	1226
在籍学生数/収容定員	1.14	1.21	1.25	1.19	1.17

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

(1) 入学者受入れの方針の明確化と周知

各学科の各種入試選抜方針については、上述したように受験生をはじめ高校教員や親にかなり浸透してきているが、まだ十分に満足できる段階ではない。ポリシー内容をより分かりやすくまとめたパンフレットやリーフレットを作成すること、オープンキャンパスにおける入試相談コーナーをより一層拡充することなどによりさらなる浸透を図ることが必要である。また、パンフレットやリーフレットの作成においては、できるかぎり高校生にわかりやすい平易な文章を用いる。

(2) 入学者受入れの方針に沿った学生受入れ方法の工夫

学部が掲げるディプロマポリシーを始めとする3つのポリシーを達成するにあたって、十分な基礎学力をもった学生を安定的に確保することは必要不可欠である。ここ数年の志願者数増加を反映して、一般入試志願者も若干の増加傾向にあることから、一般入試による入学者の比率を増すことにより、基礎学力を備えた学生の受入れ数をより一層増加させる。

基礎学力を備えた学生の受け入れ数を増やすとともに、高い学習意欲と優れた人間性の双方を備えた学生の受入れ数を維持し、さらに増加させることも本学部のさらなる発展には欠かせない。そのための方策として、AO入試における講義・実習方法を再検討し、学生の資質をより明確に精査できるシステムを実現することを前提として、当該入試による受入れ数を増やす。

推薦入試についても、学力とコミュニケーション能力などの多様な能力に秀でた学生をより多く受入れよう努力することが肝要である。入学者の入学後の追跡調査結果も考慮しながら、併設高校の受入れ数や指定校推薦における成績基準の見直しをはかるなど、入試方法の不断の改良を続ける。

(3) 入学定員に沿った適切な学生受入れ数の維持と受入体制の整備

2012年度の定員増に対応して、収容定員も今後増加することになる。アドミッションポリシーに対応した入学者を今後も持続的に受入れ、バイオサイエンスとバイオテクノロジーのエキスパートを永続的に育成するためには、収容定員の増加に合わせて、教員数の増加や学生実験室の面積拡張といった人的及び設備面での充実を図り、ポリシーの精神に沿った受入れ体制を整備して教育の質の維持と向上を図る。

⑥ 生命健康科学部

【現状の説明】

生命健康科学部は医療や健康の分野で活躍する人材を育成しているが、3つの特色を有している。第一は、総合大学の環境で教育していることである。医療系の学部／学科の多くは医療系単科大学である。その特色の第二は、すべての学部／学科が同一キャンパスにあるということである。たこ足キャンパスである医療系の学部／学科は多い。第三の特色は、学部共通科目を多くして、医療や健康の分野の基盤的領域、生命医科学の学習に力を入れているということである。これらの特色をアドミッションに生かしている。

過去の入学者数は次の通りである。

入学者数	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
	235名	306名	393名	408名

学部全体の入学生は学生定員を大きく上回っているが、医療や健康の分野で活躍するという問題意識が薄い学生や基礎学力が低い学生が入学してきていることは確かである。

【点検・評価】

生命健康科学部では学部共通科目を設け、生命医科学を共通の基盤として修得させているが、現状では基礎学力の不足で、授業の進行についていけない学生も少なからず存在している。それを解決するために、質のいい学生の獲得とともに入学前教育の充実を図ってきているが、まだ不十分である。学部生の基盤教育として臨床系医科学の修得の重視も生命健康科学部に特徴の一つであるが、自分の将来の専門性に対する問題意識の高くない学生の入学が見られる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

アドミッション戦略を学部で共有し、全体として医療や健康分野で活躍するという問題意識と高い基礎学力を有する学生の確保に努める必要がある。

生命医科学科

【現状の説明】

生命医科学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

・求める人物像

病気の予防や健康の維持増進に対して強い関心を持ち、そのために病気や健康不安の仕組みを勉強したいと思う人。将来は臨床検査技師、または薬物・資材・機器・医療技術の開発および販売に携わりたいと思う人。

・選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

生命医科学科の内容を理解し、本学科での勉学に意欲を持つとともに、求める人物像に合致し、一定の学力レベルにある人を選抜する。また面接・試験課題に対する積極的な対応力とコミュニケーション力がある人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により評価する。生命医科学科の教育目標を達成する意欲を持つか、一定の学力を持つか、学業を含む大学生活全般において生命医科学科の模範となる能力があるかどうかを総合的に評価し、優れた人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により評価し、指定された科目について高校時代に十分習得し、高度な学力を持つ人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、生命医科学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

PR委員会を全学科体制で行い、本年度は中部大学入学の実績のある高校への訪問を積極的に行っている。生命医科学科の安定した入学定員を確保するためには、臨床検査技師教育の充実と新しい活躍分野の開拓が最善の方策であると考え、入学定員は臨床検査技師国家資格取得コースが設置された後に増加に転じている実績があり、実際に入学者の9割以上が資格取得を本学科入学理由の第一に挙げている。臨床検査技師教育は過去3年中2年間合格率100%という実績が得られている。オープンキャンパスにおける人体模型の展示や実験を直接体験してもらうコーナーは、毎回好評を得ている。これまでの臨床検査技師国家試験の合格者と合格率を次に記載する。

	2009年度	2010年度	2011年度
合格者	18名	5名	19名
合格率	100%	100%	90.5%

【点検・評価】

臨床検査技師教育コースを目指す学生の指導に力を入れているが、不本意な形での断念が少なくないのが現状である。また臨床検査技師の資格と知識と技術を生かした新しい就職分野の開拓を行う必要が

ある。臨床検査技師教育における、生理検査、血液検査、病理組織検査などの検査機器がまだまだ乏しいため、備品の充実を図る必要もある。臨床検査技師国家資格取得コースは後付で設置されたため、創設費による備品の購入は極めて不十分であり、多人数の教育が困難な状況が続いている。52号館完成に続き内部に収納する機器の充実が今後期待される。

他領域においても魅力ある実習を行うために、新たな機器の整備を行う。また、医療資格取得を目指す学生の入学意欲を引き出すために、本学部における解剖学教育の充実をアピールする必要がある。そのためにも、52号館解剖実習室の設備の充実と、生命健康科学部全学科における解剖見学実習のカリキュラム化を実現することが期待される。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

愛知県および近郊には本学に加えて5校が臨床検査技師教育コースを有している。本学科は単なる臨床検査技師養成校では無く、幅広いバイオ知識を有する研究心に富んだ人材を社会に送り出すことができる体制が既に完成されている。これを維持、発展させることで、多様かつ変化に富んだ現代社会のニーズにあった人材の提供が可能となる。現存機器の維持管理はこうした幅広い人材育成には不可欠である。そのためにも、臨床検査技師の資格を有する人材の企業等への活躍分野の拡大をはかる必要がある。

健康／環境衛生／創薬／医用工学コースの充実を図り、入学時にそれらを第一希望とする入学者を増やす。52号館解剖実習室の設備充実を行い、実習室の解剖教育センター化を目指す。これにより、生命健康科学部全学科の解剖学教育の充実を行い、さらに中部圏の医療資格取得を目指す学生の解剖学教育のために、解剖学に関連する夏期講習・冬期講習等の国家試験対策も開催し発展させる。

保健看護学科

【現状の説明】

保健看護学科のアドミッションポリシーは、学科の教育目的・目標で述べたように、高度先進医療と地域在宅医療の両方に対応できる看護技術者の養成を目的としているため、以下のような人の入学を求めている。

- ・高校時代、勉学に真摯に向かい、大学での勉学に必要な基礎的な学力を持つ人
- ・人間、自然、社会に関心を持ち、人を思いやる豊かな心情とコミュニケーション能力を備えた人
- ・目標に向かって主体的に学習に取り組み、自律心を持ちながら継続的に努力できる人

【点検・評価】

保健看護学科では、2007（平成19）年度からAO入試、併設校・指定校・一般推薦入試、学力試験では特別奨学生・前期・後期試験および大学入試センター試験利用試験、さらに海外帰国子女・外国人留学生・社会人を対象とした特別選抜試験を実施している。本学科のそれぞれの選抜方法による入学者人数と割合を以下に示す。

表1 入試選抜方法別入学者人数と割合

年度	AO (人)	推薦入試入学者 (人)		割合 (%)	学力試 験 (人)	特別選抜 試験 (人)	入学者 人 (%)
		併設・指定 校	一般推 薦				
2006	0	8・11 (13.6)	28	(58.0)	33	1	81 (100)
2007	14	10・12 (9.4)	21	(44.5)	71	0	128 (100)
2008	6	10・36 (29.5)	5	(46.7)	65	0	122 (100)
2009	6	7・25 (16.9)	4	(28.4)	106	0	148 (100)
2010	7	7・33 (28.9)	11	(50.9)	55	1	114 (100)
2011	5	5・39 (36.1)	4	(49.1)	54	1	108 (100)

表1から分かることは、①指定校推薦の割合が増加していること、②AO入試を含め学力試験以外の試験を経て入学してくる学生が増えていること、③9月～11月に中部大学の合格が決まってから入学するまでの間に勉強している学生の割合が少なくなっていること等である。このような学生の中には、大学に入ってから勉強の習慣を身につけることができず、授業にテキストを忘れ、期末筆記試験の勉強方法が分からない学生が少なくない。

実際、指定校推薦入試で入学した学生の成績を見ると、いくつかの高校からの推薦学生が、毎年、成績不良者か、留年者か退学者、国家試験不合格者であることが分かった。指定校推薦は、高校と中部大学との信頼関係によって成立している。保健看護学科のアドミッションポリシーを正しく理解していただくためには、双方のコミュニケーションが大切である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

今回明らかになった問題点を1つ1つ解決するために、まず、一部の指定校の条件を高い数値に変更した。今後は、一部の指定校への訪問、入学前学習の充実、保健看護学科入学後の専門科目単位修得に向けた高校との連携などについて検討する必要がある。

理学療法学科

【現状の説明】

理学療法学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

・求める人物像

医学・生命科学や理学療法に対して関心を持ち、その知識や技能の習得に興味深く取り組むことができる人。また、他者を尊重しながら積極的にコミュニケーションを取り、リーダーとして集団をま

とめていく意志のある人。

・選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

学業および学業以外の実績について書類審査を行う。また、講義・演習では基礎学力と理解力と表現力を問う。そして、総合的な面接をもとに、理学療法学科の求める人物像に合致する人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により総合的に評価する。理学療法学科に進学する明確な意欲と基礎学力を持ち、理学療法学科の求める人物像に合致する人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により、基礎学力・理解力・応用力などを総合的に評価し、理学療法学科の勉学に取り組む、目的達成に向かって意欲的に取り組むことができる人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、理学療法学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

全学科体制のPR委員会のもと、オープンキャンパス、依頼のあった高校の模擬授業を積極的に実施している。多岐にわたる入試形態についてバランスのよい入学定員の確保に努力している。入学者数はこれまでに入学した3学年全てにおいて、入学定員を越え年々増加している。

これまでの入学者と入学定員との倍率を次に記載する。

	2010年度	2011年度	2012年度
入学者	46名	50名	53名
入学定員との倍率	115%	125%	132.5%

【点検・評価】

理学療法士という医療専門職を目指す学生に求められる努力や能力の説明に力を入れているが、1年生春学期という早期での断念が2010、2011年度とも1名生じている。（いずれも併設校入試で入学した学生である。）学内実習設備については、創設費による備品の購入以外に前身の専門学校から移管された物品の老朽化に対する更新を行い備品の充実を図る必要がある。

また、大学における理学療法士養成の課題であるこれからの理学療法を発展できる職業人の輩出のための研究機器の整備を通じ、魅力ある学科教育の充実を入学志望者にアピールする必要がある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

愛知県の理学療法士養成施設は本学を含めた7校の大学、1校の短期大学、9校の専門学校である。本学科は私立大学ではめずらしい総合大学で学べる理学療法学科であり、6つの学科を有する生命健康科学部という特徴を最大限活かした広報活動で、入学志望者へアピールしている。これを維持、発展できる教育陣、備品、実習室や研究室の確保など教育環境の充実をはかり、教育の質の低下を招かないように努める必要がある。

また併設校入試の課題に対しては、ガイダンス等での理学療法学科の説明などの働きかけの強化を通し、志望動機の確立した基礎学力のある学生確保について併設校と調整していきたい。

作業療法学科

【現状の説明】

作業療法学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

・求める人物像

身体・精神の両面にわたるリハビリテーションに対して関心を持ち、作業療法士に必要な知識と技術を大学教育の中で修得する学習意欲を持つ人。また、障害者の支援ができる温かな人格と、チーム医療を実践する協調性を身に付けようと思う人。

・選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

学業および学業以外の実績について書類審査を行う。また、面接・試験課題では、医療系の学問や職業に対する興味と障害者の支援ができる優れた人格を評価し、目標達成に向かって意欲的に取り組む姿勢を持つ人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により総合的に評価する。日常の生活態度・勉学態度が優れており、作業療法学科に進学する明確な意志と勉学する意欲を持つ人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により評価し、勉学意欲が高く、学力が一定の水準に達している人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、作業療法学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

学科開設年度より拡充していった学科専任教員の協力体制により、オープンキャンパス、高校訪問、模擬授業などを通して、作業療法の啓蒙活動を強化し、作業療法全般の魅力と当校作業療法学科のアピールポイントを高校生や保護者、高校教員に伝える活動を積極的に実施している。多岐にわたる入試形態においても徐々にではあるが全てにおいて受験者数は増加しており、安定した入学定員の確保に努力している。入学者数は開設初年度のみ定員に満たなかったが、2年目は入学定員を1.125倍越えることができた。

これまでの入学者と入学定員との倍率を次に記載する。

	2010年度	2011年度	2012年度
入学者	32名	45名	51名
入学定員との倍率	80%	112.5%	127.5%

【点検・評価】

入学生の基礎学力不足は、競争的試験制度ではない入試システムにおける入学者において顕著であり、

これらの入学者の割合を一定数以下におさえることが課題である。実際のところ、これらの入学者において退学者や休学者が出ているのが事実である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

愛知県の作業療法士養成施設は本学を含めた5校の大学、1校の短期大学、6校の専門学校である。本学科は私立大学ではめずらしい総合大学で学べる作業療法学科であり、6つの学科を有する生命健康科学部という特徴を最大限活かした広報活動で、入学志望者へアピールしている。これを維持、発展できる教育陣、備品、実習室や研究室の確保など教育環境の充実をはかり、教育の質の低下を招かないように努める必要がある。

また、競争的試験制度ではない入試システムにおける入学者の課題に対しては、現在のアドミッション活動を強化することで改善していきたい。

臨床工学科

【現状の説明】

臨床工学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

・求める人物像

工学と医学が重なる領域に対して関心を持ち、その学問・技術の修得に強い意欲を持つ人。また向上心が旺盛で、自分の知らないこともそのままにしない、何事も率先して行動し、かつ協調性を身に付けようと努力する人。

・選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

臨床工学科の内容を理解し、本学科での勉学に意欲を持つとともに、求める人物像に合致し、十分な基礎学力を有し、臨床工学技士への高い志を備えた人を選抜する。特に、試験課題・面接では、積極的な対応力とコミュニケーション力、最先端の科学技術に対する興味を評価し、総合的に優れた人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により評価する。臨床工学科の教育目標を達成する強い意欲を示し、一定の学力があり、高校時代に積極的に活動した人を選抜する。特に、面接では、学業を含む大学生活全般において、自主学修能力・向上心と臨床工学科の模範となり得るリーダーシップを持つ人を高く評価する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により評価し、指定された科目について高校時代に十分習得し、将来臨床工学領域の発展に寄与し得る力量を持つ人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接により評価し、臨床工学領域に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

臨床工学科が求める人物像は工学と医学が重なる領域に対して関心を持ち、その学問・技術の修得に強い意欲を持つ人。また、向上心が旺盛で、自分の知らないこともそのままにしない、何事も率先して行動し、かつ協調性を身に付けようと努力する人。

これまでの入学者と入学定員との倍率を次に記載する。

	2010年度	2011年度	2012年度	合 計
入学者	48名(5)	50名(13)	47名(9)	145名(27)
入学定員との倍率	120%	125%	117.5%	121%

() は、女性数

年 度	募集人員	志願者	志願倍率	受験者	合格者	倍 率
2011	40	262	6.6	256	86	3.0
2010	40	268	6.7	266	99	2.7

【点検・評価】

入学定員40人であり、2010年20%増し、2011年25%増し、2012年17.5%増しの学生数を確保でき、目標数を上回った。

オープンキャンパス等の学科紹介の効果であり、また、合格者と入学者の差（辞退者）が他学科に比して少ないことから医療職の一つである「臨床工学技士」という目標設定を明確に持つ学生が一定数いることと推察される。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

愛知県の臨床工学技士養成施設数は本学を含めた2校の大学、3校の専門学校がある。

本学科は私立大学ではめずらしい総合大学で学べる特色と伝統ある工学部と教育・研究・人材面からも連携できること、さらに、6つの学科を有する生命健康科学部という特徴を最大限活かした広報活動で、入学志望者へアピールしている。これを維持、発展できる教育陣、備品、実習室や研究室の確保など教育環境の充実をはかり、教育の質の低下を招かないように努める必要がある。

また、競争的試験制度ではない入試システムにおける入学者の課題に対しては、現在のアドミッション活動を強化することで改善していきたい。

スポーツ保健医療学科

【現状の説明】

スポーツ保健医療学科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

・求める人物像

スポーツや保健医療に対して関心を持ち、積極的に学ぶ意欲のある人。また、明るく元気で、将来はスポーツを生かした職業や救急救命士など保健・救急医療に関する職業に就いて人の役に立ちたいと思う人。

・選抜の方針

・AO（アドミッション・オフィス）試験

書類審査、講義および実技試験と面接により、学業および学業以外の実績を総合的に評価する。

スポーツや医療に関して知的好奇心が旺盛で、自己の学修目標の達成に向けて意欲的に取り組む姿勢がある人を選抜する。

・推薦試験

高等学校長の推薦と書類審査、小論文と面接により総合的に評価する。スポーツ保健医療学科に対して明確な目的意識があり、学業成績・学業以外の実績および人物ともに優れ、意欲的に勉学する志がある人を選抜する。

・学力試験

個別の筆記試験による「特別奨学生試験」「前期試験」「後期試験」および「大学入試センター試験利用試験」により基礎学力・応用力・論理的思考力などを総合的に評価し、スポーツ保健医療学科の求める人物像の要件を総合的に満たす人を選抜する。

・特別選抜試験

海外帰国子女、外国人留学生、社会人が対象である。書類審査・小テスト・小論文および面接によって評価し、スポーツ保健医療学科に対して明確な目的意識があり、かつ視野が広く柔軟な思考力を備えた人を選抜する。

【点検・評価】

2011年度の入学生は、5月1日現在65名で、定員40人の1.63倍と多かった。これは指定校推薦が17名と予想を超える人数であったためである。

選抜別ではAO試験24名、推薦試験34名、学力試験7名、特別選抜試験0名であった。AO試験と推薦試験の比率が非常に多いことがわかる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

まず入学定員を1.63倍も上回る入学者があった。これは、推薦試験で入学した学生が34名にのぼる（定員40名の85%）ことが大きな原因である。AO試験による入学者数を大幅に減らしても、定員を超過する可能性が高い。今後、学力試験での入学者増を目指したいが、推薦試験の学生の減少を見込めないため、現在の40名定員では限度があると考えられる。定員増を含めた抜本的な学生の受け入れ策が必要であろう。

⑦ 現代教育学部

【現状の説明】

設立初年度の入学試験では告知期間が短かったため学部全体での志願者は442名と少なかったが、その後毎年志願者は100名以上の増加があり、2012年度は903名と定員の6倍を超える志願者を集めることができ入学生の安定確保の土台ができた。

設置時から今年度までの学科別入学生等の推移

学科		2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
幼児教育学科	入学者	52	90	95	86	90
	合格者	106	172	158	165	172
	受験者	148	233	272	350	394
	志願者	156	241	281	357	403
児童教育学科	入学者	86	96	107	101	100
	合格者	181	233	217	221	233
	受験者	274	358	504	477	487
	志願者	286	364	525	486	500

【点検・評価】

入学生安定確保の最も効果的な取り組みは、卒業生の就職率を高め、なおかつ保育職（幼稚園教諭・保育士）と小学校教諭・特別支援学校教諭に多くの学生を輩出することである。2011年度第一期卒業生の就職率は、幼児教育学科で100%、児童教育学科で98.5%であり、ほぼこの目標は達成できたと考えている。児童教育学科では、小学校教員採用の二次試験に合格した学生が母校に報告に行くという形で、後輩にわが学部へ進学したいという希望を促すことも試みている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

現代教育学部へ入学したら将来教育職・保育職に就けるであろうという漠とした理由で入学してくる学生が少なからずいる。なかには入学してみて、授業や教育・保育実習の厳しさに気づかされ、根をあげ初志貫徹できなくなる学生もいる。残念ながら、それらの学生が留年ないしは退学に陥る傾向がある。今後は、現代教育学部に入学したら、どのような免許、資格が取れるということをより明示化する必要がある。

その方策として、今後3年先を目途に幼児教育・児童教育の2学科を1学科に統合し、幼児教育コース（仮称）では幼稚園教諭免許と保育士資格か幼稚園教諭免許と小学校教諭免許が取得できる、また学校教育コース（仮称）では小学校教諭免許にプラスして中学校理科教諭か特別支援学校教諭か幼稚園教諭の免許が取得できる、さらには社会に有用なその他の職種に就くために必要な力量を身につける第3のコースを新設することを明示化する。小学校免許に中学理科の免許を付加することは、理数科教育の強化が叫ばれている今日、教職採用の際に非常に有利になることは明白である。それに、第3のコースではどのような力量が身に就くのか明示され、受験生にアピールされれば、受験倍率はさらに上がると見込んでいる。

2.1.2 大学院研究科

① 工学研究科

【現状の説明】

工学研究科の入学定員は表1のとおりである。2010年度までは5専攻合わせて博士前期課程60人、博士後期課程22人の合計82人であったが、2011年度から博士前期課程70人、博士後期課程20人の合計90人と変更になった。

博士前期課程の最近4年間の入学者は、2009年度55人、2010年度87人、2011年度83人、2012年度77人で、志願者は、2009年度97人、2010年度131人、2011年度147人、2012年度106人である。博士後期課程の入学者は、2009年度7人、2010年度3人、2011年度1人、2012年度3人である。

表1 工学研究科入学定員

専攻	2007年～2010年		2011年～	
	博士前期課程	博士後期課程	博士前期課程	博士後期課程
機械工学専攻	10	4	10	4
電気電子工学専攻	18	4	18	4
建設工学専攻	16	8	16	4
応用化学専攻	8	4	10	4
情報工学専攻	8	2	16	4
合計	60	22	70	20

【点検・評価】

博士前期課程は2011年度から応用化学専攻と情報工学専攻で入学定員を増やし、全体で10人の定員増となっているが、入学定員を満たしている。これに対して、博士後期課程は全ての専攻で定員を満たしていない。大学院への進学率向上を図るため、1999年度より学部3年生に対して大学院への勧誘パンフの配布、大学院説明会の開催、大学院生と学部生との研究交流会の開催を行っているが、その効果はまだ確認できていない。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

課題は、入学定員の確保、さらには大学院入学者を学部定員の20%にまで向上させ、大学院の教育・研究の活性化を図ることである。

このため、大学院への進学率向上を目指した学部3年生に対する大学院への勧誘パンフの配布、大学院説明会の開催、大学院生と学部生との研究交流会の開催を今後とも継続するとともに、社会人及び海外留学生を主たる対象として2012年度から博士後期課程に秋学期入学制度を導入し、さらに来年度から長期履修制度の導入を計画している。

② 経営情報学研究科

【現状の説明】

大学院は経営情報学専攻博士前期課程、経営情報学専攻博士後期課程、それに経営学専攻修士課程とからなる。それぞれ定員は15名、3名、20名である。

【点検・評価】

これに対し2012年入学者は、1名、0名、9名である。経営学専攻は毎年10名程度の入学者を確保し定員未充足ながら運営を行っているが、経営情報学専攻は大幅な定員割れが続いている。大学院の再建は喫緊の課題である。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

大学院については経営情報学専攻博士前期課程、経営情報学専攻博士後期課程、それに経営学専攻修士課程、それぞれに合った対策を個別に考えねばならない。経営情報学専攻博士前期課程は学部からの進学者が主であることから、学部での成績優秀者に進学を促すことや、4プラス1年の早期修了コースを整備するなど進学をし易い環境を整えることを考えたい。経営情報学専攻博士後期課程については、Dマル合教員の充実にむけ長期的に取り組むことが課題と考えている。経営学専攻修士課程については社会人学生を主体に考え、近隣の商工会議所などに大学院の存在と価値を良く知ってもらう活動を現在行っているが、これを継続すべきである。

③ 国際人間学研究科

1. 各専攻のアドミッションポリシー

(1) 国際関係学専攻

【現状の説明】

国際関係学専攻前期課程では、1) 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で知識を深め活躍したいと考えている人、ならびに 2) 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題の究明・解決のために学問的成果を成し遂げ、その成果を社会に還元して自ら貢献したいと強く思っている人を、それぞれ学生として受け入れる。一方、後期課程では、1) 国際的な政治経済や社会文化に対して関心があり、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で深めた知識を体系的に整理し、専門的な成果物としてまとめ上げたいと考えている人、ならびに 2) 国際的諸課題に対する知的好奇心が旺盛で、課題を専門的観点から究明・解決する方法の創出に強い関心をもっており、社会的、学問的に大きく貢献したいと考えている人を、それぞれ受け入れる。

【点検・評価】

国際関係学専攻が学問的壁を越える指向性をもつだけに、前期課程に入学してくる学生の学問的バックグラウンドは多様である。どの学生も例外なく、国際的な諸課題に対する知的好奇心が旺盛であり、アドミッションポリシーに適合した学生であると思われる。一方、後期課程の入学生は国際的課題に対

して好奇心が旺盛であるだけでなく、課題を専門的観点から解明しようという強い意欲をもっている。その意味で、アドミッションポリシーに適合した学生が集められているといえる。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

前期課程では、国際関係学研究科の頃に比べると応募者・入学者が少し減る傾向にあるのを反省し、国際協力、社会開発、平和構築、人権問題、地球環境問題の諸分野、あるいは民族・国家の社会文化的特性に関わる分野で今後も人材が求められることを対外的に訴える必要がある。後期課程では、社会経済構造が変化していく状況を正しく把握し、国際関係学の専門的能力がそのような状況においていかに有効に発揮できるかという点を対外的にアピールし、国際関係学分野を指向する学生の発掘にいっそう努力する必要がある。

(2) 言語文化専攻

【現状の説明】

言語文化専攻前期課程では、1) ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に対して関心があり、専門的知識、理論、応用力を修得して社会的に貢献したいと考えている人、ならびに 2) 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育の分野で能力を高めたいと考えている人を受け入れている。一方、後期課程では、1) ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化に関する基本的知識を有し、それをベースにさらに学問的観点から学識を深めたいと考えている人、ならびに 2) 実践的なメディア操作、英語学・英米文化学、英語教授法を含む応用言語学、日本語・日本文学、日本語教育に関わる研究分野で新たな地平を切り開き、学問的に貢献したいと考えている人を受け入れている。

【点検・評価】

前期課程では、本学卒業生、他大学出身者、社会人、留学生の入学者を得た。2007年度から2011年度までの入学者は12名である。専攻内の日本語日本文化コースは、東海地方の大学で組織されている「高校生・大学生のための日本語セミナー」に代表者を送り、広報活動につとめた。後期課程では、本専攻の博士前期課程修了者、他大学院の博士前期課程修了者、それに留学生が入学してきた。2007年度から2011年度までの入学者は8名であった。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

前期課程では、ジャーナリズム、英語圏の言語文化、日本語日本文化の3コースのうち言語・文化に関わる分野でコンスタントに入学者がある。今後はより幅広い分野から志願者が集まるよう、国際社会においてコミュニケーションがいかに重要かつ必要であるかを強く訴えるようにする。後期課程では、言語文化の奥義を究めようとする学生側の潜在的意欲を背景に、進学希望者の発掘と入学への道を用意し、人材育成にいっそう励む。

(3) 心理学専攻

【現状の説明】

心理学専攻前期課程では、1) 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学などに対して関心があり、専門知識の修得と分析能力の向上に意欲的な人、ならびに 2) 一般社会や教育の分野で心理学の知識を生かし、心理学的側面から組織や社会の発展に貢献したいと考えている人を受け入れる。一方、後期課程では、1) 教育心理学、認知心理学、知覚心理学、社会心理学、発達心理学、臨床心理学、障害児心理学、健康心理学などに関する基本的能力が備わっており、さらにその能力を高めて社会や教育の場で生かしたいと考えている人、ならびに 2) 心理学の専門領域で必要とされる最新かつ高度な知識・研究能力を修得し、当該領域の研究内容を深めることで学問的に貢献したいと考えている人を受け入れる。

【点検・評価】

前期課程では、心理学に関心の深い学生を入学させることができ、各々の興味・関心に則した専門知識と分析能力の習得を推進することができた。後期課程では、心理・教育の専門領域で活躍する社会人を受け入れ、最新かつ高度な知識と研究能力を育成・向上させることで、彼らのさらなる社会的・学問的貢献を援助・促進することができた。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

前期課程では、情報化社会、グローバル社会で求められる人間理解力、コミュニケーション力を身につけられるよう、心理学の基礎から応用まで幅広く学べることを志願者に強く訴える。後期課程では、ますます高度化する人間社会を心理学の側面から総合的に分析・考察できる人材を受け入れ、時代が求める専門的職業人、研究者として社会に送り出せるプログラムを用意する。

(4) 歴史学・地理学専攻

【現状の説明】

歴史学・地理学専攻前期課程では、1) 世界各地で生起してきた歴史的事象や日本各地で歴史的に繰り広げられてきた種々の現象に対して興味があり、専門的な学問究明によって歴史的真実に迫りたいと強く思っている人、ならびに 2) 種々の空間的スケールで行われている人文現象あるいは自然的営力による諸現象に対して深い関心があり、学問的方法によって空間的現象のメカニズムを究明したいと強く思っている人を受け入れる。一方、後期課程では、1) 世界各地で生起してきた歴史的事象や日本各地で歴史的に繰り広げられてきた種々の現象を学問的に研究する基本的能力が備わっており、最新かつ高度な分析方法によって研究内容を深め、学問的に貢献したいと強く思っている人、ならびに 2) 種々の空間的スケールで行われている人文現象あるいは自然的営力によって生起する地理的諸現象に対して学問的に取り組む基本的能力が備わっており、さらに高度な専門的手法を駆使して研究内容を深めたいと強く思っている人を受け入れる。

【点検・評価】

前期課程では、各時代・各地域における政治・社会・文化・経済に関する強い問題関心を持ち、その問題を歴史学・地理学の学問的方法によって研究しようとする学生を入学させることができ、専門的知

識の習得とともに学問的方法論の習得を推進することができた。一方、後期課程では、地域における政治・社会・文化・経済に関する諸問題を地理学方法によって分析する基本的能力を備え、かつ明確な研究目的と意欲を持つ学生を入学させることができ、より高度な専門的方法論の習得を推進することができた。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

前期課程では、このところ社会人入学の希望者が多いことに鑑み、学部卒業生とともに社会人をターゲットにしたコース設定も視野に入れる必要がある。聴講生レベルに満足せず、自らの能力をいまいっそう高めたいと考えている志願者を見出す努力をする。後期課程では、新たな歴史観の確立や世界把握につながる斬新な研究方法を開発し、その実践者にふさわしい人材を迎え入れるよう戦略的プログラムを構想する。

2. 学生の受け入れ

【現状の説明】

国際人間学研究科の前身である国際関係学研究科当時、1991～2003年度までの13年間で101名の学生が修士課程（博士前期課程）に入学した。年間8名前後の入学であるが、とくに2002、2003年度は20名近い数の入学者があった。2004年度に国際人間学研究科へと衣替えし、3専攻体制のもとで毎年、11～14名の入学者を数えている。もともとある国際関係学専攻に加え、言語文化専攻でコンスタントに入学者があった。2008年に加わった歴史学・地理学専攻では毎年、2～5名の入学者がある。心理学専攻は入学者が1名前後で低迷している。一方、博士後期課程については、国際関係学研究科時代の国際関係学専攻の動きを継承し、さらに言語文化専攻にこれが加わって院生をコンスタントに集めている。心理学専攻は十分とはいえ、歴史学・地理学専攻は後期課程が始まってまだ日が浅い。

国際人間学研究科の外国人留学生は、2004～2009年度の間、前期課程では9～16名が在籍していた。これは本研究科に在籍する院生全体のほぼ半分に相当する。なかでも多いのは中華人民共和国（中国）からの留学生であり、多い年（2004、2005年度）は10名以上を数えた。ネパール連邦民主共和国からの留学生が続いた年もあったが、近年は多くない。全体でもやや減少の傾向がみとめられる。一方、後期課程では5～7名の留学生が在籍しており、大きな変化はない。この場合も、多いのは中国それにネパールからの留学生である。

【点検・評価】

国際人間学研究科と銘打つ大学院研究科である以上、海外から多くの留学生を迎え入れてしかるべきである。しかし現状は院生全体の半分近くを占めるとはいえ、絶対的に多いとはいえない。提携関係を結んでいる中国の大学からの入学者が多いのは当然として、経済発展が著しいアジア圏からの留学生の入学がもっとあってもよいと思われる。欧米、オセアニアなどアジア以外地域からの入学も期待しているが、現状はその気配がまったく感じられないのは問題である。欧米で日本文化が見直されている今日、国際的な言語文化、国際政治、文化、社会の理解に深く関わる専攻を擁する大学院研究科として、もっと受け入れ態勢を整えるべきであると考えている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

少子化が続く日本の現状から、今後、大学院進学者が急増するシナリオは考えにくい。そうすると、海外からの留学生を対象とした教育・研究体制を考えざるを得ない。脱工業化、サービス経済化の進む日本社会の現状に接し、留学生の中には日本の行く末を自らのモデルとして学びたいと考えている学生がアジア地域には多い。こうした進学市場をターゲットに積極的にアピールし、入学者を増やしていく必要がある。海外提携大学はその足がかりであり、まずはそのような大学に対して本研究科の存在とそこでの留学体験の意義を宣伝する必要がある。アジア以外の国々でも、近年、日本に対する関心が高まっている現状に鑑み、日本文化の特色や日本社会の特徴を幅広く学ぶ機会として、本研究科があることを積極的に広報する必要がある。

国際人間学研究科博士前期課程・修士課程入学生数推移

年度	研究科	国際人間学				計
	国際関係学	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	
専攻	国際関係学	国際関係学	言語文化	心理学	歴史学・地理学	計
1991	1					1
1992	2					2
1993	5					5
1994	7					7
1995	8					8
1996	8					8
1997	8					8
1998	6					6
1999	4					4
2000	9					9
2001	7					7
2002	20					20
2003	16					16
2004		7	6	1		14
2005		3	11			14
2006		6	4	1		11
2007		8	2	1		11
2008		2	2	1	2	7
2009		6	2		5	13
2010		5	3	1	4	13
2011		4	3		1	8
合計	101	41	33	5	12	192

国際人間学研究科博士後期課程入学生数推移

研究科 専攻 年度	国際 関係学	国際人間学				小 計
	国際 関係学	国際 関係学	言語 文化	心理 学	歴史 学・地 理学	
2001	2					2
2002	7					7
2003	5					5
2004	2		4			6
2005		3				3
2006		3		2		5
2007			4	1		5
2008						0
2009			1			1
2010			2			2
2011		3	1	1	1	6
合 計	16	9	12	4	1	42

国際人間学研究科博士前期課程・修士課程および後期課程留学生数推移

国名・地域名	2004										2005											
	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計
	KN (国期)	K N	K L	K W	小計	KN (国期)	K N	K L	K W	小計		KN (国期)	K N	K L	K W	小計	KN (国期)	K N	K L	K W	小計	
インドネシア共和国					0					0	0					0					0	0
タイ王国					0					0	0		1			1					0	1
大韓民国		1			1					0	1		1	1		2					0	2
台湾			1		1					0	1			1		1					0	1
中華人民共和国	5				5	3		1		4	9	2	5	4		11	1	1	1		3	14
ネパール連邦民主共和国	1	4			5	1	1			2	7					0	1	2			3	3
ベトナム社会主義共和国					0			1		1	1		1			1					0	1
合 計	6	5	1	0	12	4	1	2	0	7	19	2	8	6	0	16	2	3	1	0	6	22

国名・地域名	2006										2007											
	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計
	KN (国期)	K N	K L	K W	小計	KN (国期)	K N	K L	K W	小計		KN (国期)	K N	K L	K W	小計	KN (国期)	K N	K L	K W	小計	
インドネシア共和国		2			2					0	2		2			2					0	2
タイ王国		1			1					0	1					0					0	0
大韓民国			1		1					0	1					0					0	0
台湾			1		1					0	1			1		1					0	1
中華人民共和国		3	6	1	10	1	2	1		4	14		3	4	1	8	1	2	2		5	13
ネパール連邦民主共和国					0	1	2			3	3		1			1		2			2	3
ベトナム社会主義共和国		1			1					0	1		1			1					0	1
合 計	0	7	8	1	16	2	4	1	0	7	23	0	7	5	1	13	1	4	2	0	7	20

国名・地域名	2008										2009											
	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計	博士前期課程・修士課程					博士後期課程					合 計
	KN	K L	K W	K H	小計	KN	K L	K W	K H	小計		KN	K L	K W	K H	小計	KN	K L	K W	K H	小計	
インドネシア共和国	1				1					0	1					0					0	0
タイ王国					0					0	0					0					0	0
大韓民国					0					0	0					0					0	0
台湾					0					0	0					0					0	0
中華人民共和国	2	4			6	1	2			3	9	6	1			7	1	2			3	10
ネパール連邦民主共和国	1				1	2				2	3					0	2				2	2
ベトナム社会主義共和国	1				1					0	1	2				2					0	2
合 計	5	4	0	0	9	3	2	0	0	5	14	8	1	0	0	9	3	2	0	0	5	14

注：KN=国際関係学専攻， KL=言語文化専攻， KW=心理学専攻， KH=歴史学・地理学専攻

④ 応用生物学研究科

【現状の説明】

(1) アドミッションポリシー

応用生物学研究科では、以下に示すアドミッションポリシーを策定し、ホームページにて一般公開している。

- ・応用生物学研究科は、バイオサイエンスとバイオテクノロジーを基盤とする複合的な学術領域における教育研究を行い、産官学の中核となりえる有能な人材の養成及び研究を通じて社会に貢献することを目的とする。
- ・博士前期課程においては、基盤生命科学・環境生命科学・食品栄養科学領域の3分野における先端科学技術を実験・演習を通じて教育し、もって応用生物学領域における高度の専門職業人を育成することを主目的とする。
- ・博士後期課程においては、「生命・環境・食」の分野で最先端領域の研究実践を通じて指導的な教育研究者、最高度の開発技術者を育成することを目的とする。

(2) 選抜方針

本研究科の博士前期課程では、年3回（6月、10月、2月）の入試を行っている。第1回の6月試験は、中部大学応用生物学部の学生に限定した一般試験のみを行っており、この試験では学部成績GPA上位20%以内の学生に関しては書類審査と面接のみを課すことで成績優秀者の大学院への進学を促している。

博士後期課程の入試は年2回（10月と2月）行っている。一般試験、社会人試験、留学生試験とも書類審査および面接試験のみを課している。

【点検・評価】

(1) 大学院への志願者と入学者

表1に2004～2009年度の本研究科への入学志願者数と入学者数を示す。年度によって凹凸があるが、前期課程への志願者数の平均は45名で、入学者数の平均は26名（充足率108%）である。後期課程への志願者数の平均は5名で、入学者数の平均は4名（充足率67%）であり、これまでのところ後期課程の充足率は本学の他研究科と比べると比較的高い。

入学年度		前期課程		後期課程	
		志願者	入学者	志願者	入学者
2005	一般	43(1)	36(1)		
	社会人	1(1)	1(1)		
	留学生	0	0		
2006	一般	32(1)	25(1)		
	社会人	1(1)	1(1)		
	留学生	1(1)	0(0)		
2007	一般	37(4)	18(2)	7(0)	6(0)
	社会人	0(0)	0(0)	0	0
	留学生	1(1)	1(1)	0	0
2008	一般	44(2)	19(1)	2(0)	2(0)
	社会人	3(3)	2(2)	1(1)	1(1)
	留学生	2(2)	2(2)	0	0
2009	一般	69(1)	33(0)	5(1)	3(1)
	社会人	0	0	1(1)	0
	留学生	1(1)	1(1)	0	0
2010	一般	55(0)	27(0)	2(0)	2(0)
	社会人	0	0	0	0
	留学生	2(2)	2(2)	1(1)	1(1)
2011	一般	36(0)	19(0)	2(1)	2(1)
	社会人	1(1)	0	2(2)	2(2)
	留学生	0	0	0	0
2012	一般	41(0)	19(0)	4(1)	4(1)
	社会人	1(1)	0	2(2)	2(2)
	留学生	0	0	0	0
生命健康は除く。()は他大学出身者数					

本研究科への入学者のほとんどは中部大学応用生物学部の卒業生であり、他大学からの入学者は少ない。表2に、応用生物学部の各学科の卒業生数と大学院への進学者数を示す。年度により多少の凹凸はあるが、平均するとこれまで応用生物学部卒業生の約14%が大学院へと進学しており、そのうちの9%が本学の応用生物学研究科に、5.3%が他大学の大学院へと進学している。学科別に過去8年間を平均してみると、応用生物化学科と環境生物科学科ではそれぞれ卒業生の約12%と約9%が本学の応用生物学研究科に進学しており、他大学の大学院も含めるとそれぞれ18%と14%が大学院に進学している。しかし、両学科の大学院進学者数は2010年度、2011年度と目立って減少しており、大学院設立当初に比べると大学院進学率はやや減少傾向にあることが危惧される。また、2008年度以降に卒業生を出している食品栄養科学科のこの4年間の卒業生の大学院進学率は約5%と他学科に比べて低い。これらの原因について今後、十分に検討して打開策を講じていく必要がある。

一方、博士後期課程への進学者は設置以来ほぼ定着している。

(2) 社会人院生、留学生、海外インターンシップ生の積極的受け入れ

表1にあるように、本研究科の博士前期課程および後期課程への社会人、留学生の入学者は例年0～2名と少ない。2012年度には、前期課程と後期課程に社会人がそれぞれ1名と2名入学したが、留学生はいなかった。2005年の大学院開設当時から、社会人や留学生を積極的に受け入れる努力をして来ているが、一層の努力が望まれる。なお、2012年度には海外インターンシップ生1名を受け入れている。

表2. 各学科の卒業生数と大学院への進学者数

卒業年度		応用生物化学科	環境生物科学科	食品栄養科学科	合計
2004	卒業生数	138	122		260
	本学大学院	11	24		35
	他大学院	11	10		21
2005	卒業生数	134	110		244
	本学大学院	10	15		25
	他大学院	2	4		6
2006	卒業生数	122	121		243
	本学大学院	11	5		16
	他大学院	10	10		20
2007	卒業生数	96	102		198
	本学大学院	10	7		17
	他大学院	6	7		13
2008	卒業生数	99	89	88	276
	本学大学院	19	11	2	32
	他大学院	13	3	1	17
2009	卒業生数	98	113	86	297
	本学大学院	17	5	2	24
	他大学院	10	9	5	24
2010	卒業生数	110	114	67	291
	本学大学院	12	3	4	19
	他大学院	1	2	1	4
2011	卒業生数	85	94	83	262
	本学大学院	13	4	1	18
	他大学院	3	1	0	4
合計	卒業生数	882	865	324	2071
	本学大学院	103(11.7%)	74(8.6%)	9(2.8%)	186(9.0%)
	他大学院	56(6.3%)	46(5.3%)	7(2.2%)	109(5.3%)

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

(1) 大学院説明会の充実

大学院への進学率向上のために、2012年度6月入試に向けて大学院研究科長および専攻主任から学部生に対して進路選択の一つとしての大学院のアピールを行うこととした。併せて、現役の大学院生の生の声を聞いてもらう機会を設ける。

(2) 大学院入学試験の見直し

大学院が掲げるディプロマポリシーを始め、アドミッションポリシー、カリキュラムポリシーの3つのポリシーを達成するにあたって、十分な基礎学力をもった学生を安定的に確保することは必要不可欠である。このために、外国語と専門科目の筆記試験科目、それに面接試験について、試験担当者間で、アドミッションポリシーにそってどのような学生を選抜するのかの意識統一を徹底し、科目間の難易度の調整や試験科目選択方法などの見直しを行う。

(3) 社会人大学院生や留学生の積極的受け入れとHPの充実

他大学からの受験生や社会人院生の受け入れの拡大を目指し、大学院HPを充実する。また、グロー

バル化に向けて留学生や海外インターンシップ生を一層積極的に受け入れる。そのために、英文HPの充実を図ることが必要である。本学工学研究科が計画している9月入学については、未だ本研究科委員会では議論をしていないが、今後、前向きな姿勢で検討する。

(4) 5年一環教育に向けたプログラムの構築と新たな審査法の検討

後期課程進学者に対する博士論文研究基礎力の審査方法を検討し、順次導入することにより、5年間を通じた一貫したプログラムを構築するとともに、基礎力達成を審査するための、新たな審査法の検討を行う。

⑤ 生命健康科学研究科

【現状の説明】

生命健康科学研究科のアドミッションポリシーは、以下のとおりである。

生命医科学専攻においては、科学的な根拠に基づく「予防」に軸足を置いた保健・医療やそのもとになる生命医科学分野で、高度の専門職業人や教育・研究を担う人間の養成を目的としている。

看護学専攻においては、高度化し、複雑化した保健・医療の現場での確に対応できる高度な専門知識・技術を持ち、看護医療学分野や地域医療における指導的な人間の養成を目的としている。そのために、以下の資質を持った人物を求める。

- ① 生命医科学の分野についての専門知識を持ち、科学的な根拠に基づく「予防」をめぐる課題に取り組むことができる。あるいは看護学分野の高度な知識・技術を持ち、看護学領域においてリーダーシップをとれる専門職を目指している。
- ② 生命医科学や看護学が現代社会に有する重要性を理解し、特に、倫理的な判断ができる。
- ③ 問題解決に必要な専門知識や技術を自ら持続的に修得する意欲を持つ。
- ④ 習得した専門知識・技術の有用性を総合的に判断することができる。
- ⑤ 自らの考えを的確に伝達できるとともに、他者からの情報を理解でき、それらに基づき議論することができる。

現在、学年進行中で完成年度を迎えていないが、全体として定員を確保できている。

【点検・評価】

学生数は確保されているが、現状では、将来への問題意識や学力が高い学生が必ずしも入学している訳ではない。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

研究の重要性や大学院生として経験することの意義を学部学生に周知し、問題意識の高い学生の確保に努める。良い研究成果を挙げ、納得いく就職先／進学先の実績をあげることを通して、生命健康科学研究科の質を向上させ、質の高い学生の確保に努める必要がある。

生命医科学専攻

【現状の説明】

2011年度入学大学院生は、大学院認可の関係で、周知が十分でなく、学部卒業生40名中2名（5%）であったが、以後は15～20%の学生が大学院に進学するという見通しを、学生との面談を通して得ている。

【点検・評価】

本研究科の理念の学生への啓蒙活動には一定の効果があったのではないかと考えている。また、現在臨床検査技師として病院に就職するコースを選択する場合も、修士課程に進学する有用性が認識されつつあり、それも追い風となったと考えている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

本学出身の入学者は一定数確保できたと考えているが、今後は学外からの入学者も増やし、幅広い人材を確保できるよう広報に努めなければならない。また、本学学部生の勉学へのモチベーションを高め、より多くの学生を大学院へ勧誘するかが今後の課題でもある。

看護学専攻

【現状の説明】

開設以来、入学する大学院生は毎年2～3名と少人数だが、選択した領域は総合看護学領域（看護教育学）、生活支援看護学領域（地域保健）、発達看護学領域（小児看護学）（母性看護学）と、1領域に集中することなく3領域への広がりがみられている。若干、生活支援看護学領域の選択が少ないように感じるため、成人看護学や老年看護学、精神看護学など臨床看護を中心とするコースへの広報が必要である。将来的には、毎年、全領域から修了生を社会に送り出し、看護学専攻の教育実績を積み上げて、地域の臨床看護の質の向上と看護学の発展に寄与したいと考えている。

【点検・評価】

看護学専攻は修了生を出していないので、地域医療の社会的ニーズに伝えていくのはこれからである。2年間、社会人である大学院生の教育を通して、教員は大学院生の成長を感じているが、教育の効果が明らかになるのは大学院生が職場に帰ってからである。今後は、修了生の評価や就職先の意見を聞いて、より魅力的な修士課程になるよう検討する必要がある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

看護学専攻は、毎年少人数でも大学院生を迎え、質的に高い教育を提供して実績を積んでいけばよいと考えている。そのためには3つの領域が修了生を社会に送り出す必要がある。今後は夜間の授業も増える可能性があるため、広報活動を行って各領域が入学生を迎えることができるよう検討する必要がある。

2.2 入試・広報活動

2.2.1 広報活動と学生募集

【現状の説明】

広報部広報課では学生募集を目的として、広報部とアドミッション戦略室との深い連携により、一年間の広報活動計画を立案しそれに沿い活動している。

現在、主要な広報活動として(1) 高校訪問(2) 高校の教員対象の本学企画進学説明会(3) 本学出身の教員対象の進学説明会(4) オープンキャンパスの実施(5) 業者企画の進学説明会(6) 講師派遣(7) 大学見学者への対応(8) 各種ツールの制作(9) 各種アンケートへの回答(10) 進学情報誌への出稿(11) 新聞への出稿(12) テレビ・ラジオ利用(13) 看板、交通広告の出稿(14) WEBへの出稿(15) DVD制作(16) マスコミ対応があげられる。

【点検・評価】

(1) 高校訪問

愛知県、三重県、岐阜県、静岡県西部に所在する高校については広報部員全員が担当制を敷き高校訪問している。長野県の一部、滋賀県の一部については訪問出来る者が行う。

高校訪問の第一の目的は、入学者、在籍者の様子また卒業生がいる場合には就職先、進学先を毎年報告し信頼感を深めることである。

二つ目の目的は、入試制度の変更点の説明を行うことである。

(2) 高校の教員対象の本学企画進学説明会

新年度の入試制度が決定しそれを説明する資料が完成すると、高校の進路関係の先生対象に進学説明会を各地で開催している。以下は過去5年間の参加高校数と参加者数の推移である。

(2011年度のみ本学を見学していただく目的にて各地区会場を中止して本学で3日間実施した。)

高校教員対象本学企画進学説明会概要

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
会場数	14	12	12	12	本学のみ 3日間
参加高校数	207校	188校	183校	197校	173校
参加者数	212名	190名	186名	204名	182名

(3) 本学出身の教員対象の進学説明会

本学出身の教員は工業高校を中心に150名程が活躍している。1999年5月15日に隔年開催の企画としてスタートした。例年30名前後の教員の参加がある。

最近では応用生物学部、人文学部で普通科高校の教員として活躍する者が増加している。

今後益々母校への進学指導に大きな役割を果たす。

地道な広報活動として重要であり今後も継続の予定である。

(4) オープンキャンパスの実施

高校の教員はオープンキャンパスに参加して、自分の目で進学志望校を定めるよう指導している。その為に、2007年度から2011年度の5年間で総参加者数が倍増している。参加した者の進学率は高く、重要なイベントである。

オープンキャンパス参加者推移表

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
春のオープン キャンパス	550名	550名	600名	850名	847名
夏のオープン キャンパス	3,610名	4,500名	5,396名	6,270名	7,642名
秋のオープン キャンパス	488名	560名	735名	910名	825名
合計	4,648名	5,610名	6,731名	8,030名	9,314名

(5) 業者企画の進学説明会

業者が名古屋、浜松、静岡、四日市、津、金沢、福井、富山で開催する進学説明会に参加して大学広報並びに入試相談に対応する。1年間で70～80会場に広報部員が手分けして参加する。一次接触者を得ることができ重要な広報活動となる。

(6) 講師派遣

高校または業者の依頼で教室とか体育館を利用して生徒に大学・系統別説明をする企画である。例年500件～600件の依頼があるが重要度と時間的都合により選択して表のように参加する。一度に複数の生徒に本学の説明ができるので、大変効果の多い広報活動である。

講師派遣参加者推移表

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
講師派遣回数	286件	359件	364件	308件	260件

(7) 大学見学者への対応

総合学習の一環で高校生が、校外研修の一環として保護者が本学見学で来学されることが年々多くなっている。綿密な準備をして対応している。

大学見学会と見学者数推移

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
件数	40	48	42	47	54
見学者数	1,693名	1,980名	1,554名	2,627名	2,993名

(8) 各種ツールの制作

本学を的確に説明するツールとして色々な印刷物を制作している。
年々資料請求者が増加しているため、内容、仕様、費用を考え制作している。

(9) 各種アンケートへの回答

進学情報誌関係の業者から多くのアンケート回答依頼がくる。情報公開の意味からも
また、同時に広報活動に繋がることにより原則的に協力している。

(10) 進学情報誌への出稿

受験生のための進学情報誌に多く出稿している。
効果測定をして重要雑誌を毎年選択している。
情報誌を見た生徒が資料請求し、志願者数の5年連続増加へと結びついている。

資料請求者と志願者状況

	2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度
資料請求数	データ無	30,101	34,087	42,689	50,538
志願者数	8,532名	9,237名	10,959名	13,699名	13,959名

(11) 新聞への出稿

愛知広報委員会企画三誌連合、朝日新聞大学ランキング、中日新聞学長インタビューなど重要度の
高い企画に参画している。
新聞広告出稿は減少傾向にある。

(12) テレビ、ラジオ利用

テレビ、ラジオのメディアについてはオープンキャンパス告知の目的にてメ〜テレ、東海テレビ、
東海ラジオにスポット出稿している。徐々にではあるが、効果が出ている。

(13) 看板・交通広告への出稿

2011年度までは看板・交通広告に出稿していたが2012年度よりすべて中止とした。
2013年度より必要度合いの高いものに対して再び出稿する予定。
原稿内容についても将来を見据えて検討する予定ある。

(14) WEBへの出稿

制作課によりホームページ、フェイスブック、Monthly Chubuの充実
各情報誌会社のWEB企画にも参画している。

(15) DVDの制作

大学見学会などに一時に多くの人に大学を正しく知らせる目的にて大学を紹介する15分程度のDV
Dを制作している。
2012年度については一部を訂正して制作、プリントして高校、および希望の生徒には配布する。

(16) マスコミ対応

広報部は学生募集を目的にした広報をしているが、学生のニュース・研究成果・大学の行事等あらゆることを新聞・ラジオ・テレビなどプレリリースを行っている。そのため毎年250件程の頻度で報道されている。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

今後の広報活動について、次の方策を考えている。

(1) 広報費削減の方策

資料請求者の増加により、印刷費、通信運搬費が年々増加傾向となるが、一次接触者、二次接触者と志望度合いにより適切な資料を配布することにより紙による応募要項の制作部数を減少させ費用増を防止する。

2012年度には、看板、交通広告の掲出を一年間完全に休止するが、低価格で有効な広報活動ができるように検討していく。

(2) 入学率を上げる方策

合格者が全員入学するべく合格者に対して大学を詳しく紹介する『後援会会報信頼』『メディアから見た中部大学』『活躍するOB』等をタイムリーに送付している。今後も入学率を上げることに努める。

(3) 入学者の質の向上の方策

アドミッション戦略室を中心にして学科ごとに戦略を立てる。可能な学科については学力試験での入学率を高めていく。特に特別奨学生試験、前期試験、センタープラス試験、センター試験利用試験の志願者の増加に努める。広報部としては進学上位の高校訪問を丁寧にする。

2.2.2 入学者選抜方法

【現状の説明】

(1) 入学者選抜の理念と方法

本学の創立者、三浦幸平先生の建学の理念「不言実行、あてになる人間」を建学の精神とし、この精神を具現化するために、「基本理念」「使命」「教育目的」を定めている。

入学者選抜の理念もまた「建学の精神」を基本精神とし、各学部・学科（各研究科・専攻）の「教育研究上の目的」及び「アドミッションポリシー」に基づいている。入学者選抜の方法は、この理念を生かす人材の確保ができるよう努めている。

① 学部1年生の入学者選抜の理念と方法

学部1年生試験は、工学部・経営情報学部・国際関係学部・人文学部につづき社会的要請に応え、応用生物学部が2001年度入試から、生命健康科学部が2006年度入試から、現代教育学部が2008年度入試から実施している。

入学者選抜の方法は、多様な資質を持った者を正当に評価できるよう工夫を凝らし、異なる選抜方法による入学試験を実施している。

入学者選抜の理念は、「本学の建学の精神と基本理念及び教育研究上の目的、アドミッションポ

リシーを理解し、本学の学習・教育環境を積極的に活用して、深い知識と幅広い領域の学修を志している意欲に燃えた学生を選抜する」であり、「各学部・学科が教育研究上の目的を達成するための基本とされる知識を有することが必要で、そのためには、高等学校等での基礎となる教科等の勉学を必要とし、積極的な学習姿勢を堅持していることが大事である」ことを受験生に明示し、選抜している。

各試験種別ごとの試験別選抜理念と選抜方法は、次のとおりである。

試験種別	試験別選抜理念	選抜方法
AO入試	従来の筆記試験では十分に測定できない秘めたる能力や多様な能力を、今までに修得した学業及び学業以外の実績を基に多面的・総合的に評価をし、自己の学修目的を充分認識し自己実現を図ろうとする意欲ある入学者を選抜する。	1. 書類審査（調査書、志望理由・自己推薦書、活動報告書） 2. 各学科が行う講義・実習等の成果 3. 面接
併設校推薦 指定校推薦	本学園の併設高等学校及び本学指定の高等学校が、本学からの指定条件に基づき、高等学校で修得した学業及び課外活動等の実績を基に高等学校長が推薦することにより意欲ある入学者を受入れる。	1. 書類審査（調査書、推薦書） 2. 面接
一般推薦	高等学校長の推薦により、高等学校で修得した学業及び課外活動等の実績を基に評価し、自己の学修目的を充分認識し自己実現を図ろうとする意欲ある入学者を選抜する。	1. 書類審査（調査書、推薦書、活動評価書、活動実績証明書） 2. 小論文の作成 3. 面接
特技推薦	本学が指定するクラブ活動の基準に該当し、高等学校長及び高等学校のクラブ顧問の推薦により、高等学校で修得した学業及び課外活動等の実績を基に評価し、自己の学修目的及びクラブ活動での活躍を充分認識した意欲ある入学者を選抜する。	1. 書類審査（調査書、推薦書、クラブ活動暦） 2. 面接 3. クラブ実技
特別奨学生	健康でかつ学業、人物ともに優れ、本学の建学の精神と基本理念に深く賛同し、自己実現を図ろうとする意欲ある学力優秀な入学者を選考する。	1. 書類審査（調査書） （高認者には面接を課す） 2. 各学科指定の学力試験 3. 特別奨学生面接試験
一般学力 試験	高等学校等で修得した学業と本学各学部・学科が必要とする基礎学力を有しているかを学力を中心に判定し、入学者を選抜する。	1. 書類審査（調査書） （高認者には面接を課す） 2. 各学科指定の学力試験
留学生 特別選抜	今までに修得した学業や日本語学習を基に留学目的を評価し、自己の学修目的を充分認識し自己実現を図ろうとする意欲ある入学者を選抜する。	1. 書類審査（履歴書、卒業証明書、成績証明書） 2. 各学部指定の小テスト 3. 小論文
帰国子女・ 社会人 特別選抜	今までに修得した学業及び留学経験又は社会経験を基に学習目的を評価し、自己の学修目的を充分認識し自己実現を図ろうとする意欲ある入学者を選抜する。	4. 面接

なお、一般学力試験には前期試験（A方式・B方式・AM方式・BM方式）、後期試験、大学入試センター試験利用試験が含まれる。

② 編入学の入学者選抜の理念と方法

編入学試験は工学部・経営情報学部・国際関係学部・人文学部につき応用生物学部が2003年度入試から、現代教育学部が2010年度入試から実施している。

入学者選抜の理念は、「今までに修得した学業を基に、さらなる決意を持って、学業を継続し、自己実現を図ろうとする意欲ある入学者を選抜する」である。

なお、編入学試験は、9月試験と10月試験を実施している。これは受験機会の複数化を計ることにより、入学者確保を狙いとしている。いずれの試験も書類審査（学業成績、志望理由、活動実績書）、小論文、面接で入学者選抜を行っている。

③ 大学院の入学者選抜の理念と方法

大学院試験は工学研究科、経営情報学研究科、国際人間学研究科（2003年度までは国際関係学研究科）につき応用生物学研究科が2005年度入試から、生命健康科学研究科が2011年度入試から、現代教育学研究科が2012年度入試から実施している。

入学者選抜の理念は、「本学の建学の精神と基本理念及び教育研究上の目的を理解し、本学の研究・教育環境を活用して、専門的能力と真理の探究を志している入学者を選抜する」である。

なお、大学院試験は、6月試験、10月試験、2月試験の3回実施している。各研究科とも試験種別は一般試験、社会人試験、留学生試験の試験制度を設け、特異性を生かせる選抜となっている。いずれの試験も書類審査（学業成績、研究計画書等）、筆記試験、面接で入学者選抜を行っている。

(2) 入学者選抜等の組織

本学には入学者選抜の理念に基づく入学者選抜が公正かつ円滑に行われるよう「入試委員会」を設けその任に当たっている。入試委員会は学長を委員長とし、副学長、学監、学部長、研究科長、学長の指名する者をもって構成されている。

なお、入試委員会とは別に学部の入学者については「各学部選抜委員会」が設けられ入学者選抜の任に当たっている。各学部選抜委員会は学長を委員長とし、副学長、学監、学部長、副学部長、学科主任、学長が指名する者で構成されている。

大学としての入学者選抜の在り方、入試制度については、全学的統一を図りながらも、入学者の選抜については各学部・学科、研究科の意向が尊重され、審議されている。

なお、入試問題の作成は、副学長を入試問題作成委員長とし、入試問題作成委員会を設け、入試委員会と連携を密にしてその任に当たっている。

また、入学試験に係る、採点等システム管理・運用は、学監を委員長とし、採点等に係るシステム管理・運用委員会を設けその任に当たっている。

【点検・評価】

入試委員会・選抜委員会等入学試験に係る各委員会の下、組織的な責任体制を確保し、入学者選抜はその理念に基づいた質の高い・多様な資質を持った入学者を選抜するよう、入試制度に工夫を凝らして行ってきた。

入試制度も多様になることから、毎年入試制度ごとの入学者の成績を点検・検討し、入試制度に反映

2009年度入試から2012年度入試の入学試験状況推移は表1のとおりである。

次に2012年度の試験制度別入学者数は表2のとおりであるが、大学全体で一般学力試験での入学者の割合は47%、以下推薦試験39%、AO入試14%となっている。また、入学者の地域別分布は愛知県が62%を占め、東海3県（愛知、岐阜、三重県）で87%となっている。

(2) 編入学試験

第3年次編入学試験は社会的要請に応える形で1993年度入試から定員枠を設けて実施している。また、新学部・学科の設置とともに編入学定員も見直されている。

2012年度入試からそれまでの入試制度（指定校試験、AO入試、学力試験）を廃し、選抜方法を書類審査、小論文、面接で行う制度に一本化した。

2009年度入試から2012年度入試の編入学試験状況推移は表3のとおりである。

志願者数は減少し、2012年度は23人であり、入学者数は14人で入学定員を満たさない状態が続いている。

(3) 大学院試験

学部・学科の新設に伴い、大学院も研究科・専攻及び課程の設置が続き、2012年度には6研究科15専攻を有している。

大学院の入試制度は大きな変更はなく、2012年度の試験制度は次のとおりである。

- ・6月試験 学内選考
- ・10月試験 ①一般 ②社会人 ③留学生
- ・12月試験 ①一般 ②社会人 ③留学生

2009年度入試から2012年度入試の大学院入学試験状況推移は表4のとおりである。博士後期課程は入学定員を満たしていない状態が続いている。同じく、経営情報学研究科、国際人間学研究科は研究科の定員を満たしていない。

なお、大学院入学者のうち本学出身者は119人で81.5%、社会人試験での入学者は18人で12.3%、留学生試験での入学者は4人で2.7%であった。

【点検・評価】

(1) 学部1年生試験

本学の入試制度は多様化から個性化へと進み、独自の入試対策を編み出し、入試方法に様々な工夫を凝らし志願者の確保に努めている。同時に、大学改革の一環としてアドミッション戦略室を設け入学者の確保にも努めている。その結果、2012年度の全学部の志願者数は13,959人となり入学者数も2,603人（入学定員充足率1.14倍）であり評価できるものとなっている。

一方、学科によっては入学定員が充足できていない学科もあり、学科間でも多様化が始まっている。一つの方策では全ての学科に対応できない状況になりつつあり、方向は同じであっても個々の施策が必要となり、個性化の必要性は学科にまで及んでいる。

(2) 編入学試験

編入学試験は9月試験と10月試験を実施している。これは受験機会の複数化を図るとともに入学者の確保を狙いとしているが、編入学定員割れが常態化している。

社会的要請に応えることから始まった編入学制度ではあるが、編入学者の勉学意欲や学力の高水準

化は必ずしも見ることはできず、編入学定員を含め見直しが必要となっている。

ただ、編入学が生涯学習を志す者に道を開いていることは意義深いことである。

(3) 大学院試験

学部以上に志願者・入学者の状況は多様化が進んでいる。

経営情報学研究科、国際人間学研究科は入学定員を満たさない状況が常態化しており見直しが急務となっている。このような状況において大学院改革が進められており、平行して入学者選抜の在り方も見直され、選抜基準等を含め年々見直しが図られ、各研究科・専攻の特異性を生かす試験となりつつある。

【質保証のための課題と継続的改善・改革に向けた方策】

(1) 学部1年生試験

入学者選抜の理念に基づく入学者選抜の方法、入試制度の見直し・検討が課題となっている。

入学者数の確保と入学者の質の確保が反比例しないよう入学定員の管理等入学者選抜に細心の注意を払いながらも常に受験生に支持される入試制度を設けることにより質・量ともに満たされた入学者を確保しなければならない。

なお、入学者の質保証のためには、入試制度だけで維持できるものではなく、本学の「教育」「就職」との継続的な連携によることが不可欠である。

(2) 編入学試験

編入学定員等の見直しを含め編入学試験そのものを見直す時期に来ている。編入学定員の充足は難しく、目的意識を持った編入学者の確保に努めることが精一杯である。

入試制度の多様化、個性化はすでに終了しており、今後の方策は、今一度初心に戻り「社会に開かれた大学」として、真に生涯学習を志す者への入学制度として位置づけることにある。

(3) 大学院試験

理系研究科においては、6年一環の教育・研究を目途とし、文系研究科においては、有識社会人・研究者等の養成を目指し、内部進学者のより一層の増大・確保ができる入試制度を必要としている。また、文系研究科においては他大学出身者の受け入れを図り、社会人試験の充実を模索しなければならない。なお、社会人試験は社会的要請、生涯学習に応えることができるものを目指す。

表1 学部1年生入学試験状況推移（2009年度～2012年度）

学部・学科 (専攻)	2009年度				2010年度			
	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数
機械工	150	810	468	210	150	815	402	172
電気システム工	80	355	243	116	70	437	188	99
電子情報工	80	246	206	89	70	350	185	99
都市建設工	70	148	128	55	60	153	133	57
建築	120	445	284	157	120	407	227	112
応用化	70	342	266	88	70	358	247	97
情報工	100	578	319	152	100	615	285	126
工学部計	670	2,924	1,914	867	640	3,135	1,667	762
経営情報	120	513	251	165	130	527	225	135
経営	120	550	262	160	130	664	246	161
経営会計	--				--			
経営情報学部計	240	1,063	513	325	260	1,191	471	296
国際関係	50	143	117	59	50	140	111	47
国際文化	50	146	112	57	50	115	93	44
中国語中国関係	40	55	41	20	40	45	40	21
国際関係学部計	140	344	270	136	140	300	244	112
日本語日本文化	80	287	193	97	70	276	211	100
英語英米文化	80	175	146	61	70	144	122	56
コミュニケーション	80	228	168	90	70	184	130	64
心理	80	414	199	100	70	416	227	128
歴史地理	80	264	185	79	70	306	193	92
人文学部計	400	1,368	891	427	350	1,326	883	440
応用生物化	80	821	341	134	90	886	273	104
環境生物科	80	629	251	93	90	720	233	103
食品栄養科	80	391	289	107	--			
食品栄養科学専攻	--				48	325	129	56
管理栄養科学専攻	--				32	184	118	38
応用生物学部計	240	1,841	881	334	260	2,115	753	301
生命医科	100	294	234	87	60	351	151	66
保健看護	100	798	356	148	100	839	240	114
理学療法	--				40	487	76	46
作業療法	--				40	141	83	32
臨床工	--				40	268	99	48
スポーツ保健医療	--				--			
生命健康科学部計	200	1,092	590	235	280	2,086	649	306
幼児教育	80	241	172	90	80	281	158	95
児童教育	80	364	233	96	80	525	217	107
現代教育学部計	160	605	405	186	160	806	375	202
合計	2,050	9,237	5,464	2,510	2,090	10,959	5,042	2,419

学部・学科 (専攻)	2011年度				2012年度			
	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数
機械工	130	1,021	350	140	160	1,084	463	179
電気システム工	70	491	201	76	80	487	224	89
電子情報工	70	506	188	86	80	409	195	95
都市建設工	60	225	149	79	60	208	129	50
建築	100	540	246	122	110	544	265	114
応用化	70	548	275	102	90	553	331	100
情報工	100	813	291	129	120	819	363	136
工学部計	600	4,144	1,700	734	700	4,104	1,970	763
経営情報	110	566	224	133	110	579	237	124
経営	110	592	227	138	110	540	235	125
経営会計	80	158	122	65	80	320	179	97
経営情報学部計	300	1,316	573	336	300	1,439	651	346
国際関係	50	161	109	56	50	193	152	67
国際文化	50	145	107	55	50	195	139	68
中国語中国関係	40	80	58	32	40	68	53	19
国際関係学部計	140	386	274	143	140	456	344	154
日本語日本文化	70	322	202	77	70	331	216	77
英語英米文化	70	215	160	75	70	201	165	72
コミュニケーション	70	252	159	91	70	300	177	82
心理	70	498	181	73	70	513	204	90
歴史地理	70	376	202	89	70	386	214	74
人文学部計	350	1,663	904	405	350	1,731	976	395
応用生物化	90	905	287	104	110	972	348	118
環境生物科	90	860	284	97	110	848	320	125
食品栄養科	--				--			
食品栄養科学専攻	40	304	119	52	60	278	148	58
管理栄養科学専攻	40	310	106	52	40	224	104	46
応用生物学部計	260	2,379	796	305	320	2,322	920	347
生命医科	60	367	159	75	60	330	170	66
保健看護	100	1,404	243	108	100	1,351	225	117
理学療法	40	482	94	50	40	558	93	53
作業療法	40	174	101	45	40	250	94	51
臨床工	40	262	86	50	40	273	86	47
スポーツ保健医療	40	276	89	65	40	242	100	74
生命健康科学部計	320	2,965	772	393	320	3,004	768	408
幼児教育	80	354	165	86	80	403	172	90
児童教育	80	492	221	101	80	500	233	100
現代教育学部計	160	846	386	187	160	903	405	190
合計	2,130	13,699	5,405	2,503	2,290	13,959	6,034	2,603

表2 試験制度別入学者数（2012年度）

	AO	推薦	特別 奨学生	前期				後期	センター試 験利用	特別 選抜	合計
				A	B	AM	BM				
機械工	8	65	14	28	6	18	10	25	2	3	179
電気システム工	6	40	11	12	3	3	7	2	2	3	89
電子情報工	13	47	2	9	6	2	2	11	3	0	95
都市建設工	14	8	2	10	1	2	3	8	2	0	50
建築	20	45	6	14	3	3	9	8	3	3	114
応用化	6	21	12	25	7	10	4	11	3	1	100
情報工	3	41	12	29	13	11	7	17	1	2	136
工学部計	70	267	59	127	39	49	42	82	16	12	763
経営情報	27	63	4	10	2	2	4	11	1	0	124
経営	34	63	3	7	4	3	4	7	0	0	125
経営会計	21	37	4	10	3	2	2	16	2	0	97
経営情報学部計	82	163	11	27	9	7	10	34	3	0	346
国際関係	14	20	5	17	2	0	3	4	0	2	67
国際文化	17	21	3	14	2	1	5	3	2	0	68
中国語中国関係	6	2	1	2	2	0	3	3	0	0	19
国際関係学部計	37	43	9	33	6	1	11	10	2	2	154
日本語日本文化	11	28	1	13	4	4	6	8	2	0	77
英語英米文化	22	18	1	20	3	2	3	2	1	0	72
コミュニケーション	12	28	3	17	4	4	3	9	2	0	82
心理	13	42	6	11	6	4	2	5	0	1	90
歴史地理	12	32	2	8	3	3	4	8	2	0	74
人文学部計	70	148	13	69	20	17	18	32	7	1	395
応用生物化	9	36	20	21	20	3	6	1	2	0	118
環境生物科	12	50	12	31	12	4	3	1	0	0	125
食品栄養科	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--
食品栄養科学専攻	9	25	7	8	3	2	1	1	2	0	58
管理栄養科学専攻	1	19	8	4	4	1	4	1	4	0	46
応用生物学部計	31	130	47	64	39	10	14	4	8	0	347
生命医科	7	32	4	6	3	2	4	6	2	0	66
保健看護	7	61	13	11	7	5	7	5	1	0	117
理学療法	5	19	11	8	3	1	0	2	4	0	53
作業療法	14	12	7	7	6	1	2	2	0	0	51
臨床工	7	15	7	6	3	1	5	2	1	0	47
スポーツ保健医療	19	43	4	0	4	1	1	1	1	0	74
生命健康科学部計	59	182	46	38	26	11	19	18	9	0	408
幼児教育	4	53	7	7	4	4	4	6	0	1	90
児童教育	3	34	17	19	12	3	4	6	2	0	100
現代教育学部計	7	87	24	26	16	7	8	12	2	1	190
合計	356	1,020	209	384	155	102	122	192	47	16	2,603

表3 編入学試験状況推移（2009年度～2012年度）

	2009年度				2010年度				2011年度				2012年度			
	入学定員	志願者数	合格者数	入学者数												
機械工	15	10	5	5	5	2	2	2	5	4	3	3	5	0		
電気システム工	10	2	2	2	2	2	2	2	2	0			2	1	0	
電子情報工	10	2	2	2	2	1	1	1	2	0			2	2	2	2
都市建設工	5	1	1	0	2	1	1	1	2	0			2	0		
建築	5	2	2	2	4	3	2	2	4	4	4	3	4	3	2	2
応用化	5	1	1	1	2	0			2	0			2	2	2	1
情報工	10	5	3	3	4	2	1	1	4	1	1	0	4	2	2	2
工学部計	60	23	16	15	21	11	9	9	21	9	8	6	21	10	8	7
経営情報	10	6	4	3	5	0			5	2	1	1	5	1	1	1
経営	10	7	5	2	3	4	4	3	3	1	1	1	3	3	3	2
経営情報学部計	20	13	9	5	8	4	4	3	8	3	2	2	8	4	4	3
国際関係	10	2	2	1	10	2	2	2	7	1	0		7	1	0	
国際文化	10	0			10	1	1	0	7	2	2	2	7	1	1	1
中国語中国関係	--				--				6	0			6	1	1	1
国際関係学部計	20	2	2	1	20	3	3	2	20	3	2	2	20	3	2	2
日本語日本文化	5	2	2	2	2	0			2	1	1	1	2	2	1	1
英語英米文化	5	0			2	1	1	0	2	2	1	0	2	0		
コミュニケーション	5	0			2	0			2	0			2	0		
心理	5	2	2	1	2	1	1	1	2	1	1	1	2	1	0	
歴史地理	5	0			2	0			2	1	1	1	2	0		
人文学部計	25	4	4	3	10	2	2	1	10	5	4	3	10	3	1	1
応用生物化	10	0			2	1	0		2	0			2	0		
環境生物科	10	0			2	0			2	0			2	1	0	
食品栄養科	10	1	0		2	0			2	1	0		--			
食品栄養科学専攻	--				--				--				2	0		
管理栄養科学専攻	--				--				--				--			
応用生物学部計	30	1	0	0	6	1	0	0	6	1	0	0	6	1	0	0
幼児教育	--				5	0			5	0			5	1	1	1
児童教育	--				5	0			5	1	0		5	1	1	
現代教育学部計	--				10	0	0	0	10	1	0	0	10	2	2	1
合計	155	43	31	24	75	21	18	15	75	22	16	13	75	23	17	14

表4 大学院入学試験状況推移（2009年度～2012年度）

	入学定員	2009年度			2010年度			入学定員	2011年度			2012年度		
		志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数		志願者数	合格者数	入学者数	志願者数	合格者数	入学者数
機械工学（前期）	10	20	13	8	17	7	5	10	40	17	16	21	17	12
（後期）	4	2	1	1	0			4	1	1	1	0		
電気電子工学（前期）	18	22	16	14	26	22	16	18	26	19	16	22	18	15
（後期）	4	3	3	3	1	1	1	4	0			1	1	0
建設工学（前期）	16	10	9	7	27	25	22	16	19	19	16	15	15	13
（後期）	8	1	1	1	1	1	1	4	0			0		
応用化学（前期）	8	9	9	5	20	19	17	10	10	8	7	26	25	21
（後期）	4	1	1	1	1	1	1	4	0			1	1	1
情報工学（前期）	8	36	23	21	41	31	27	16	52	36	28	22	18	16
（後期）	2	1	1	1	0			4	0			3	2	2
工学研究科計	82	105	77	62	134	107	90	90	148	100	84	111	97	80
経営情報学（前期）	15	7	6	6	6	3	2	15	7	5	5	3	1	1
（後期）	3	2	0	0	1	1	1	3	1	1	1	1	0	
経営学（修士）	20	14	9	7	14	13	12	20	16	12	11	12	9	8
経営情報学研究科計	38	23	15	13	21	17	15	38	24	18	17	16	10	9
国際関係学（前期）	4	13	8	6	11	5	5	4	8	6	4	5	4	3
（後期）	2	0			0			2	4	3	3	0		
言語文化（前期）	4	4	3	2	6	3	3	4	3	3	3	5	4	4
（後期）	2	2	2	1	2	2	2	2	1	1	1	0		
心理学（前期）	4	1	0	0	3	1	1	4	3	2	0	1	1	1
（後期）	2	0			0			2	1	1	1	0		
歴史学（前期）	4	7	5	5	4	4	4	4	3	1	1	3	2	2
・地理学（後期）	2	--			0			2	1	1	1	0		
国際人間学研究科計	24	27	18	14	26	15	15	24	24	18	14	14	11	10
応用生物学（前期）	24	70	52	34	83	60	42	24	37	22	19	43	22	19
（後期）	6	6	6	3	5	4	4	6	4	4	4	8	7	7
応用生物学研究科計	30	76	58	37	88	64	46	30	41	26	23	51	29	26
生命医科学（修士）		--			--			12	3	2	2	26	22	15
看護学（修士）		--			--			6	5	4	3	2	2	2
生命健康科学研究科計		--			--			18	8	6	5	28	24	17
教育学（修士）		--			--			12	--			7	4	4
教育学研究科計		--			--			12	--			7	4	4
合計	174	231	168	126	269	203	166	212	245	168	143	227	175	146